
ジェネラルの男と竜人の娘～戦いの果て～

HATI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジェネラルの男と竜人の娘と戦いの果て

【Nコード】

N0576BA

【作者名】

HATI

【あらすじ】

とあるMMORPGに嵌っている男。

カンストしたキャラから切り替えて新しいキャラクターを作成し、育てていた。

起きると見知らぬ場所に放り出され、身体は自分の物ではなく、育てていたキャラクター。

そこから始まったのは、男にとって過酷な物語。

与えられた力は天下無双には遥かに遠く、立ちはだかる敵は強大無比。

寄り添うのは竜の血を引いた少女と、仲間達。

彼の戦いが否応無く幕を開けた。

※戦闘等でやや過激と思われる表現があるため御注意下さい。

解説1（前書き）

本編中に説明の難しい事柄などを解説させて頂きます。

今回主人公のプレイしていたディエスに付いて簡単に解説します。

※読まなくても本編を読む分には特に支障はありません。

解説 1

ディエスってどんなゲーム？

- ・アクションRPG型のMMO
- ・HP（生命力）／MP（魔力）制
- ・レベル150までのレベル制。職業は作成時から固定。但し武器やアクセサリによって別の職業のスキルが使用できる。

- ・レベルによる上昇ステータスはSTR（筋力）・AGI（敏捷）・INT（知識）・DEX（器用）・VIT（耐久）。

職により比率が違う。また上昇幅も多少ランダム性がある。一部のステータスがほぼ上昇しない職も多い。

- ・職業は30種類以上。各職ともメリットデメリットが調整されており、多少比率に違いはあるがどの職もそれなりに人口が居る。

- ・アイテムを必要とする特殊な職業がある。作中のベルギオンの職業である「ジェネラル」もその一つ

- ・神や悪魔も上級の敵として登場する。

- ・100後半から装備可能な武器防具のグレードが大きく上がり、150になると職によって単身で神と戦える。

- ・多人数でのプレイヤーVSプレイヤー戦争も活発である。「ジェネラル」は戦争専用職に近い。

- ・プレイヤー数は10万人前後

主人公の作成キャラクター

※初期作成キャラ

- ・LV150（MAX）

- ・名前 ????
- ・職業 ソード・スター（双剣タイプ）
- ・装備 ??????

※サブキャラクター（本編に使用されているキャラクター）

- ・LV50
- ・名前 ベルギオン
- ・職業 ジェネラル（将軍）
- ・装備

武器 バスターソード（ミスリルと鋼の合金）
 防具 ヘマタイトの防具（鎧や手甲など一式）
 アクセサリ ???の指輪

職業の説明

※ソード・スター

・AGIとSTRの上昇率が高く、DEXとINTも平均並に上昇する。但しVITに関しては平均の半分以下

・防具の場合重装備は装備できない。軽装備を装備時、盾を装備しない場合速さに補正が掛かる。

・武器は短剣・長剣・片手剣・双剣。投擲用の短剣も装備可能。他重量が軽い武器も扱う事ができるが、ダメージは低下する。

・魔法はバフ（補助）のみ取得する。

・対人・対モンスター共に物理攻撃面では最上級。防具をきちんと調えればAGIの高さも合わせり生存率は非常に高い。

・極まればソロで神BOSも狩れる。

・スキルは攻撃と回避に集中している。

※ジェネラル

- ・STR・DEX・VITが平均より少し高く上昇する。AGIは平均。INTはほぼ上昇しない（スキルにMPを使用しない）
- ・武器防具共に騎士専用の重装備以外を装備できる。
- ・魔法は使用できない（MPがほぼ無い為装備による魔法も不可）
- ・ジェネラル個人の戦闘力は特別高く無い。レベルを150にして装備を完全に固めても同条件のソード・スター等には大きく劣る。
- ・スキルは自軍に対する補正・敵軍に対する逆補正に関するもの殆ど。

初めての大地（前書き）

ファンタジー小説となります。

初めての大抵

キーボードを叩く硬質な音が閉め切られた部屋に響く。
他にはパソコンのHDDが僅かに煩い程度だ。

10分もしないうちにキーボードを叩く音は静かになり、
それを叩いていた男はゆっくりと体重を椅子の背もたれに預けながら、
ペットボトルのお茶に口を付ける。

「今日はここまでにしとくか。またMP回復剤買い込まないと」

昨日あれだけ買い込んだのに、と男は内心溜息を付く。

パソコンの画面には、2年ほど前に始まったMMORPG「ディ
エス」のプレイ画面と、
彼の操作するキャラクターが移っている。

時刻は既に深夜2時を回っている。

彼は最近派遣の仕事を満了した為、資金に少し余裕がある此処2.
3ヶ月はこの「ディエス」の新キャラ育成に費やそうと決めていた。
初期のキャラクターが最高レベルになり、装備も質は上限に来て
しまっている。

新しく装備を更新してもバリエーションの違いにしかない。

その初期キャラクターをプレイ中に特殊職業のキーアイテムを手
に入れた為、
朝のうちからその特殊職業を作成し育てていた。

その職業は「ジェネラル」、將軍の職業だ。

MMOでは余り見かけない職で、ソロが主な彼もその目新しさに加え作成に必要なキーアイテムも手に入ったことで作成した。

レベルは50ほど。レベル制限ギリギリの装備と回復剤を注ぎ込む事で加速してあるとはいえ、数日で上げたにしては上出来だ。

最高レベルの150までは遠いが、ステータスはある程度上がってきている。

これなら暇な間に100は目指せると男は先ほど落ちた気分を良くし、パソコンを付けたまま布団に入り込む。

明日は次の狩場に行こう。あそこは金銭も経験値も悪くないし……そう考えながら、男は眠りに落ちていった。

次の日、男の身体はもうそこには無い。

「んあ？」

寝転がっている男が陽射しの鋭さに目を覚まし、抜けた声を出す。

「なんだ？」

カーテンで遮られている筈の直射日光に炙られる事の不快さと、疑問。

そもそも男の背中の感触は慣れ親しんだベットのものではない。

男は身体を起こし、周囲を見る。

地面は草が生い茂っていて、近くには端が此処から見えている小さい湖。

周囲を木々が囲んでいる。

森の中の湖、といった印象だった。

「いや、いやそうじゃないだろ」

なんでここにいるのか。いやそもそもここは何処？
そんな疑問がぐるぐると男の中で渦を巻くが、夢だと判断し頬をつねる。

「……痛い」

男の希望は外れ、男は少し迷った後勢い良く後ろに倒れこんだ。

「意味わかんねえし」

こんな景色に見覚えは無い。
それにこんな鎧着込んだ覚えも……

（鎧！？）

焦って身体を起こし、身体の内側をみる。

武装している。剣は直ぐ横に置いてあるし、全身に軽装とはいえ鎧を着ていた。

「こんなもん持ってた覚えも着た覚えもねー、おいこれ」

まったく身に覚えが無い事が続いていたが、ふと見た剣、それに

鎧に僅かばかり男は引っかかりを憶えた。

つい最近、つい直前まで見ていた覚えが……

「ああ、これ『ディエス』の装備、か？」

「『ディエス』の熟練プレイヤーである以上、装備の見た目を見間違うはずが無い。

剣の模様も装飾も、僅かの違いも無く同じだ。

それに気付いた時、男の心臓の鼓動は一気に加速する。
それは恐怖と危機感による物だった。

ドツドツドツ、そう心臓に急かされる。

急いで湖へ駆け寄り、水面に反映された顔を見る。

「お、俺じゃない……、こいつ、ベルギオンじゃねーか」

寝る前まで上げていた自キャラの顔が、紛れも無く水面に映っていた。

数分ほどじっと水面を見つめていたが、しばらくして長い時間を掛けて防具を外し、

ベルギオンは何度か水を救って顔を洗う。

湖の水は澄んでおり、恐らく煮沸や濾過をしなくても飲めそうだ。

防具を外しかなり楽になった後、分からないながらも情報を整理する。

「俺は確かに部屋で寝ていた、よな」

一つ、ここは全く見覚えは無い。

二つ、手持ちの物をひっくり返したところ、金以外は寝る前に持ちキアラ……、

ベルギオンが持っていたものと同じだった。サブだったこともあり大した物は無かったが。

三つ、意識しないと思いつけないが、ベルギオンの記憶が断片的にある。それは俺の操作してきた経歴とほぼ相違なかった。

分かるのはこの程度だ。

そして、この現実感を否定できる材料は一向に無い。

つまり男はベルギオンで、見知らぬ世界に放り出されたことになる。

その結論に辿りつき、ベルギオンは頭を抱える。

「嘘だろお……いや嘘じゃねえ。意味が分らんぞ」

そう呟いてもこの悪夢から覚める様子は無い。

ベルギオンはガリガリと苛立ちから頭を掻くが一旦思考を切る。

これ以上考えてもどうしようもない袋小路だからだ。

脱いだ鎧や手甲、足の脛当てを取り付ける。

防具のつけ方など分らなかったが手が憶えているのか、思ったより早く付ける事が出来た。

もしこのままなら現状で生きていく事になる。
得てして防具、特に鎧は高額なものだ。

レベル制限の関係でレベルにしては良い程度の物だが、金も無い以上多少苦しいという理由で置いて行くわけにもいかない。

そもそも、人間が居るのか？

もし俺しか人間が居ないとすれば――

そんな想像をしてしまい冷たく血が凍るような感触が全身を舐めた。

――！

「なんだ？」

何か今聞こえたか？

そう思いベルギオンは背後へと振り返る。

そうすると、以前では不可能であっただろう距離まで鮮明に見える。

確かこの職は命中補正もあった筈だ。この視力はその影響だろうか。

その視力に、モンスターに襲われる少女がハッキリと移った。

僅かにベルギオンは迷ったが、剣を掴み駆け出す。

以前の肉体より遥かに早い動きに意識が付いていかず、こけそうになるが強引に力で傾いた体を振り戻す。

（なんつー身体だよ。明らかに筋肉の量と密度がかつてと違いすぎる）

ぐんぐんと距離を詰めていく。少女は逃げているが、モンスターのほうが早い。

その上3体が組織立って追いつめている。猶予はほぼない。

追い立てているのはやけに筋肉の付いた緑色の小人。

見た事は無いが、イメージとしてはゴブリンのやつだ。

ベルギオンはそう判断し、より力を込め速度を増す。

その走る音に少女が気付くほど距離が狭まった時、ベルギオンは軸足となった右足を蹴り上げ、先頭のモンスターに対し膝蹴りを顔面に決める。

走ってきた速度と蹴り上げた力が合わさり、モンスターの首が縦に180℃捻じ曲がる。

こいつはやった。そういう手応えだった。

残りは二体。木で作った棍棒をそれぞれ一つ持っている。

ベルギオンが僅かに後ろを見ると少女が倒れている。体力の限界のようだ。

勢いで来てしまったが、喧嘩程度ならまだしも、生死に関わるような戦いの経験は全く無い。

身体能力で遅れを取ることはなさそうだが、走ってきた疲れによる汗とは別の冷たい汗がじわりと額に流れる。

ゴブリン達はいきなり現れて一体屠った男に戸惑いを感じたものの、ベルギオンの覇気の薄さに勝機が高いと見たのか武器を構える。

見た所、二体一というハンデがあるが、あの棍棒を直撃しなければ戦えそうだ。

しかしベルギオンに複数に囲まれた経験は無い。どうなるか分からない。

（先手、取るか……！）

剣を抜き、両手で構える。

握り方は身体が勝手に教えてくれる。

力を込めて、振り上げてから一気に振り下ろす！

重い長剣を振り下ろす事で重い風圧の音が響き、予想以上の力に身体が前に持っていられる。

剣線上にいたゴブリンは避けようとするが、力を込めて加速のついた剣をかわせず大きく斬れた。

完全に姿勢が崩れたベルギオンの頭を目掛けて、最後のゴブリンが棍棒を振り下ろす。

ベルギオンは咄嗟に地面に突き刺さった剣から手を離し右腕で頭を庇う。

ぐわん、と身体が揺れる。

手甲の防御力が優ったのか、痛みは無いが衝撃で右腕が痺れる。

（くそ、見た目より響くじゃねーかよお……）

頭に受ければ致命傷は免れないだろう。

ゴブリンは気色の悪い声で笑い、更に棍棒を振り上げる。

「図にのってんなよくそ！」

その笑いにベルギオンは不快感が優り、咄嗟に右足で腹を目掛け

て前蹴りを離す。

さっきの一撃で僅かにひるんだ事で完全に油断していたのか、蹴りが綺麗に腹に入った。

「GuG A a ! ?」

腹を蹴られ、胃液と悲鳴を撒き散らしゴブリンは一目散に逃げ出した。

ベルギオンは出来れば倒しておきたいと思ったが、初めての戦いで気力と精神力が疲労したのか、
一氣に疲れが出てくる。

ベルギオンは座り込んで乱れた息を整える。
何度かの呼吸で呼吸のリズムが戻った。

「つと、そうだ。さっきの女の子は」

完全に忘れていた事に気付いて焦りつつも、ベルギオンは少女に近づく。

金髪、というよりは茶色の髪の毛。

あどけない寝顔だ。多少汚れはあるが傷などとは見当たらず、呼吸も安定している。

素人目には分からないが、問題は無さそうだ。

しかし、余程疲れていたのかすぐには目は醒ましそうに無かった。
仕方ないので、お姫様抱っこで湖の近くまで連れて行く。

ベルギオンは、人が見つかった事に、目が覚めてから初めての安堵を抱いたのだった。

竜人の村

（小さい獣とかもいたし、森から連れてきて正解だったかな）

ベルギオンは女の子を湖の片隅に降ろし、座り込んで湖の水で喉を潤した。

地下水が通っているのか程よく冷えていて、先ほどの疲れが乾きと共に癒えていく。

森には獣の気配はするが、此方に襲い掛かるような危険なものはいないようだ。

（人が居るって分かったのが不幸中の幸いかねえ。さっきのモンスターー見ると差し引きだけど）

先ほど追い払ったゴブリンは普通の獣より知能があり、そして暴力的だ。

誤って動物を殺してしまったときの嫌な感じが心に湧いたが、ああしなれば多分女の子を助けなかっただろう。

ベルギオンは割り切れたわけではないが、そう思う事にした。

ああいった奴らが居るという事は、日本に居た頃よりもずっと気をつける必要がある。

道端で襲われてしまうような世界だと思った方が良さだろう。

「ゲームならまだしも、これは向いてねえ……」

真っ当に生きてきたベルギオンの価値観は未だ以前に引きずられているが、

大分引いてきた右腕の痺れで戻される。

初めての戦いで生き延びた事よりも、これからを思うとベルギオンは不安を感じた。

「——ん、ん」

そうしている内に女の子が起きたのか、目が薄っすらと開いていく。

すると勢い良く体を起こし、両手で体を押さえて怯えた顔で左右を見渡す。

襲われる寸前に意識を手放していたから、危機感がまだ強く残っている様子だ。

「落ち着け」

「あ、え、あなたは……、ゴブリン達は!？」

(会話が通じた。内心少し不安だったんだが)

日本語でどうやら通じるようだ。

異国語だった場合間違はなく面倒な事になっていただろうと考えていた為、

心配事が一つ無くなる。

「あんたを追いかけてきてた奴らは追い払った。少なくとも今は大丈夫だ」

「そ、そうですか」

女の子の体から力が抜ける。

そこでようやく俺に意識が向いたのか、姿勢を正して俺に頭を下げる。

しかし、ベルギオンを見る目や体が少し硬い。警戒はされてるの

かもしれない。

「助けていただいたようでありがとうございます。助かりました」

「運良く居ただけだ。見殺すのもどうかと思ったしな」

「いえ、命の恩人です。何かお礼をさせていただきたいのですが」

（中々義理堅いようだ。いやこれが当たり前なのか？ 俺も命の恩人がいたら頭が上がらないか）

女の子はしっかりと此方を見据えている。目は髪と同様、鮮やかなブラウンだ。

服は中世的というか。ロングスカートにシャツ、その上にカーデイガンを羽織っている。

しかし、ベルギオンは腕を組んで考え込む。

お礼と言われても困る。まさか金を巻き上げるわけにもいかないし。

とはいえはつきりいつて今のベルギオンには何もないに等しい。

人間が生きるために必要なのは……

「そう言われると悪い気はしないな。

お礼か……すまないが食事と今夜の寝床どうにかならないか」

そう言われた女の子はきよとした顔をし、先ほどより盛大に力が抜ける。

もしかしてお礼に体でも求められると思ったのかもしれない。

可愛い女の子は好きだが、見た目14そこそこの娘に手を出すほど道を外れてはいない。

「分かりました。そういう事でしたら、うちの村に来ていただければお力になれます」

俺が変な男ではないと思ってくれたのか、女の子は大分声に張りが出ている。

しかし村か。色々聞くことができるかもしれないな。

「あ、私はラグル・ロティエといいます。ラグルでいいですよ」

「俺は……、ベルギオンだ」

「ベルギオンさんですか」

迷った末、本来の名前でなくベルギオンと名乗る。

幾つか理由はあったが、今はこの名前の方がらしいだろうと判断した。

ラグルは名前しか言わなかった事を少し不思議に思った様子だったが、

大したことではないと判断したのか失礼しますね、と言って手や顔を洗う。

ずっと走っていたから様子だし汗が気持ち悪いのだろう。

ここは少し風が強いし、このままここに居たらラグルが風邪を引いてしまうかもしれない。

「何時までもここに居るのもいかな。少し陽が落ち始めているし落ち着いたら村に行こう」

「分かりました。村へはここから20分くらいで着くと思います」

顔を洗い終わったラグルはそう言うのと立ち上がり、此方です。と案内し始める。

見た目は華奢なようだが、しっかりしているようだ。

ベルギオンも立ち上がり、ラグルに付いて行き森へ入る。

森を移動がてら幾つか話をしてみるとしよう。

そういえば此処がどこかも気になるな。むしろそれを先に気にするべきだった。

「ベルギオンさんは冒険者の方ですか？」

「ん、まあそんな感じか……、どうして？」

「北の大森林でもこの辺りは奥まっけていて、余り普通の人間の方はいらっやいません。」

それに私を襲ってきた三体のゴブリンを追い払えてましたし」

（北の大森林……、聞いたことはないな。この世界はディエスではないのか？）

「ちょっと待ってくれ。ここは北の大森林っていうのか？」

「？ ええ、そうですよ。ご存知無いですか？」

「あー、えーと、田舎の方から出てきてね。全然詳しくないんだ」

「それは……、知識無しでこの森に入るのは危険です。」

普段なら危険なモンスターは居ませんが遭難してしまいます」

と、ラグルは少し怒ったような顔をしてベルギオンに忠告する。

「あ、ああすまん。あー少し聞きたいんだが、

クラッグスやペルペイトって国を聞いたことはあるかな」

クラッグス、ペルペイトはディエスの中でも大きい国だ。

ここがディエスの世界なら知らないという事は無いだろう。

ベルギオンは内心そう思いながら、心を必死に落ち着かせながら答えを待つ。

「えっと、すみません。どちらも聞いた事は無いです。」

この辺りで一番大きい国はティレ王国ですね」

「――ッ」

それを聴いた瞬間、

心の何処かが捻じ曲がるような負荷をベルギオンは味わう。

（まだ、まだディエスの世界なら知識で何とかできた！）

ベルギオンは僅かだが、此処がディエスの世界ではと期待していた部分があった。

しかし、ティレ王国などという国は無いし、ある筈の国は無いという。

口の中に苦々しい思いをベルギオンは感じていた。

「……そうか、いや大したことじゃない。そうだ。

さっき普通の人間って言ってたけど、人間以外にも来たりするのか」

そんな事も知らないんですか、と言いたげな少し冷たい視線がラグルからベルギオンに浴びせられる。

その視線に耐性の無かったベルギオンは少しだけ竦む。

「そうですか。えっと、北の大森林はエルフ族やドワーフ族、それに私達竜人族や他にも亜人族達が主に暮らしているんです。住んでいる場所は種族毎に分かれていますけど」

「竜人……俺には普通に見えるけど」

それに竜人という言葉は始めて聞いた。

どういう種族なのか気になる。

そう言うトラグルは少しだけ悲しげな顔をしてしまう。悪い事をきいたか。

長老に竜人について聞いてみる方が良いかもしれないな。

「血が薄いので。夜目が利く程度です。——濃い血を受け継ぐ人はもう殆ど居なくなってしまっ」

「なるほど」

「この辺りは余り危険な獣やモンスターは居ないので、今まで問題はなかったんです。でも最近ゴブリン達が住み着くようになって……」

亜人族。ゲームやアニメなら良く見かけていたが、実際に居るようだ。

イメージは湧くが、実際にあってみないと何ともいえない。ただエルフは綺麗なイメージで描かれる事が多い。一目見てみてみたい。

「あいつ等が出てくるようになったのは最近か」

「はい。長老はロードゴブリンが来ているかもしれないと」

「ロードか。そりやまずいな」

ロードってなんだ。と思ったが有名な言葉かもしれない。

冒険者で通した以上聞くのもまずいだろうか。

会話の流れから多分かなり強いゴブリンだろう。

「姉が討伐に出ようとしたんですが皆に止められてしまっ」

「そりや凄い姉ちゃんだな。ただあいつ等は群れてるし一人じゃ無理だろ。」

止めて正解だよ。しかしそうするとラグルが襲われたってのはまずいな」

「はい。始めは農作物が荒らされたりする程度だったんですが、数が増えてきたのか最近過激になってきて。でも襲われたのは初

めてです」

追われた恐怖を思い出しのか、少しラグルは身を振るわせる。
そのラグルの頭に手を載せ、何度かやさしく叩いてやる。

（甥っ子はこれで笑顔になったもんだが）

「や、やめて下さい！ 恥ずかしいです」

とラグルに怒られてしまう。

内心少ししょんぼりした。まあ女の子の頭を気安く触る物でもないか。

しかし元気は出たようで、なによりだ。

その表情を見て、ベルギオンは心の動揺が収まっていくのを感じた。

諦めるのはまだまだ早いだろう。遭難も防げた事だし。

「見えてきましたよ」

ラグルに言われてベルギオンは正面を向くと、森を広く切り開いて出来た町が見えてくる。

森の中で作ったにしては中々大きい。少しずつ切り開いてきたのだろう。

家は木で出来てる。それに畑等も手入れされていた。

先ほど川もあったし、人里から遠いみたいだが住むだけなら大変だが悪くない場所なのだろう。

「先に長老の家に案内しますね」

「頼んだ」

ラグルに続いて町を歩く。

余所者のベルギオンにどう反応するのか気になったが、ラグルが居るからか多少じろじろと見られるものの変な視線は感じなかった。

「ここです。長老、いらっしゃいますか」

ラグルはそう言って一回り大きい家のドアを何度かノックする。

「あいとるぞ」

少ししわがれた声の中から聞こえてくる。

ラグルはドアを開けて、ベルギオンを中へと促した。

「失礼します」

「失礼」

中に入ると、材料は竹や木ばかりだが見事な家具が幾つも置かれている。

そこに白い髭を伸ばした男の老人が椅子に座って茶を飲んでいた。

「どうしたラグル。それに其方の男は誰かの」

ジロリと、長老に見据えられる。

この眼、まるで観察されているようだ。

少し癪に障ったが、村の若い娘が誰かも分からない男を連れてきたんだ。

その位はされるものかとベルギオンは勝手に納得する。

「葉草を摘みに湖の近くへ行ってきたんですが、そこでゴブリン達

に襲われて……、

このベルギオンさんに危ない所を助けて貰いました」

それを聞いた長老は先ほどの態度を会釈で謝る。

「おお、それはラグルが世話になりましたな。しかしゴブリン共、とうとう我らを襲い始めたか。

——ラグル、お前は一度家に帰りキリアに無事を伝えてきなさい。ベルギオン殿と少し話がしたいので」

「分かりました。ベルギオンさんは食事をしたいと言っていたのでその用意もしてきます」

「構わん。芋を煮たやつがあるのでこっちで食事を振舞うとしよう。構わんかなベルギオン殿」

そう意見を振られ、ベルギオンは反射的に頷いてしまう。

とりあえず食事は食べれるようだ。

そうしてラグルは家へ戻り、長老は鍋の置いてある竈に火をつけてベルギオンに茶を振舞う。

「たいした物はないがの」

「いえ、朝から何も食べていなかったので助かります」

ずずっと、茶を啜る。

何かの葉っぱを干した物だろう。

すこし渋みはあったが美味しく飲める。

「さて、まずはラグルを助けていただいた事、感謝に堪えませぬ」

「いえ、運が良かっただけです。襲っていたやつらもそうやばいモンスターでもなかったし」

「それでもベルギオン殿が居なければ命が危うかったようだ。さて、今日は宿の当てはあるのですかな」

「恥かしながら全く」

「ではラグルの家の隣に小屋があった筈。それを使うといい。キリアにも伝えておきましょう」

「キリア？」

「おお、これは失礼。ラグルの姉で家長のキリア・ロティエの事です」

「そうでしたか。屋根のある所なら問題ありません」

シートなんかはあるみたいだし、野宿よりは全然良さそうだ。

（野宿なんて経験も無いしな）

旅人は珍しいのか、長老は他にも幾つか上機嫌で話を振ってくる。少しでも情報が欲しいベルギオンにはそれは願っても無い事だ。年寄りの長話に感謝するときが来るとは思わなかったが。

「ベルギオン殿は冒険者の方ですか？ 商人でも中々此方には来ませんし」

「ええ、旅をしながら移動しています。ただ森で道に迷ったようで大分深い所までできてしまったみたいです」

「なるほどのう。今は刈り入れ時で人手がおりませんが、手が空いたら道案内をつけましょう」

「良いのですか？ 案内人も帰り道が危険では」

「キリアに頼みましょう。彼女なら多少のゴブリンは物ともしません。

大した礼にはなりませんがそれまでは逗留すると良いでしょう」

それは願っても無い相談だ。

金もないし、何をするにもある程度人のいる大きい町に行きたいと考えていた。

森を抜ければ道くらいはあるだろうし、次の指針になる。

ベルギオンはそう考えて、是非とも御願いたします。と頭を下げた。

「おや、スープも温まったようすな。お注ぎしましょう」

「御馳走になります」

出されたスープには大きく切った芋が幾つも入っており、付け合せに硬く焼かれた白パンが出された。

こういう村では食料は貴重な筈だ。味わって頂こう。

温かいスープは塩が利いており、パンもスープに漬けるとふやけて食べやすくなる。

自分で思っていたより腹が減っていたのか、ベルギオンはガツガツとスープを平らげてしまう。

満ち足りた気分だった。

「御代わりはいりますかな。ああ遠慮はいりませんぞ。芋は掘れま
すし塩は海が近いので安く手に入ります」

「すみません。ではもう一杯だけ」

よそって貰ったスープを、先ほどより味わって食べる。

暖かい。今此処に生きている感覚を、ようやく味わえた気がした。

竜人の簡単な歴史、そして悪い状況

芋は旨い。芋に味は無いが、スープの塩が効いていてホクホクしていた。

「さて、満足戴けたようですね」

「ええ、ご馳走様です。美味しかったです」

長老は勢い良く食べたベルギオンに気を良くしたのか、上機嫌だ。しかし大分歳をとっているだろうに、かくしゃくとした老人である。

食器を重ねて水場へと持っていく。

「おお、すみません」

「いえ」

再び席に座り、渋みのある茶をすする。

落ち着いた雰囲気だ。聞くなら今かとベルギオンは判断する。

「少し聞きたいことがあるのですが」

「なんですか？ 答えられる事でしたらなんでもどうぞ」

「はい。私は田舎の方から出てきてましてね、いまいち地理が分からないのです。

地図があれば見せて欲しいのですが」

「なるほど、そういえば準備無しに北の大森林に来て迷われたのでしたな。

余り広い範囲ではありませんが、地図は奥にしまって有りますので探しておきましょう。

直ぐ見つかると思います。その時は連絡しますよ」

その親切に、思わずベルギオンは頭を下げた。

「ありがとうございます。助かります。あともう一つ、

良ければいいんですが、竜人に付いて教えてもらえませんか？」

「良いですぞ。今となっては有名な部族では有りませんが、隠すようなことも有りませんのでな」

そう言うのと長老はパイプを取り出し、かまわんですかな？ と聞いて了承すると火を付け一息吸う。

「始まりは聖年1年、今から800年ほど遡ります。この辺は神話として伝えられているので省きますぞ。

もし興味があれば街で本を読むのも良いかもしれませんな」

そう言うって長老は竜人の歴史を語り始める。

（歴史もいずれ調べる必要があるか）

「当時は魔物の数はとてつもなく多く、この大陸を支配していたと言われています。

そこで数少ない抵抗勢力が竜だったのです」

「竜？ 竜人では無くて？」

「ええ。当時の竜は今大陸に居るモンスターの龍とは違い、高い知能と莫大な魔力を持っていたと言われています。

数は少なかったが、魔物もおいそれと手が出なかったとか。

それでも少しずつ押されておりましたが、そこで聖魔大戦が始まります」

聖魔大戦？ その言葉にベルギオンは頭を傾げる。

聞いてみたいが、紀元元年で起こったって事はかなり有名だろう。

（本もあるらしいし、ここで聞くより自分で調べてみるか）

「この戦いは有名なのでしっておりますかな？　そこでの戦いで魔物を一度この大陸から滅ぼしましたが、

その戦いで竜は絶滅の危機に瀕します。

聖魔大戦の折地上に降りて人々と共に戦った神は、魔物との戦いで武勇を振るった竜が居なくなる事を惜しみ、

人と交わるように竜を人へと変えたといえます」

「それは……なんというか、御伽噺のような話ですね」

「そう言われるのも仕方ないですか。ワシも全てを信じているわけでは有りませんが、代々伝わってきましたの。

その当時の竜人は竜であった頃と変わらないほど強く、また人となった事でより知恵をつけたといえます

しかし、人と交わる事は出来ても、血が合わなかったのか子供も出来にくく、生まれた子供は親の竜人より大分弱かったと言います」

「血が……、ではこのような奥に住んでいるのは」

「ええ、血を守る為でも有ります。もはや人と変わらなくなるほど薄くなってしまいましたかな。

寿命も人と変わリません。それに初代の竜人は空白の100年の間に亡くなってしまったと伝えられております。

彼らは純粋な竜でしたから、もしかしたら生きていたら今でも居たのかもしれませんが」

「竜は偉大な先祖なんですね」

「ええ。今の時代で濃い血をもったキリアは竜を特に尊敬しております。無論、ワシ等も」

「ですか。話して頂きありがとうございます」

空白の100年。戦いの後に何か起こったようだ。

（しかし、血は薄くなったといっても大分歴史のある一族なんだな）

長老も、どこか誇らしそうに見える。

それだけに、血が薄くなっていくのは悔しいのかもしれないとベルギオンは思った。

何か声をかけようとするも、良い言葉は思い浮かばず、止む無くベルギオンは別の話題を尋ねる。

「そういえば、ロードゴブリンが近くに住み着いたとか」

「ラグルに聞きましたか。一月ほど前からゴブリンの姿を見るようになりましたかの。」

ゴブリン自体が群れで来ることは、決して珍しい事ではないのですが。どうにも巣穴の大きさが違うのです」

巣穴の大きさという群れの数が違うのか、それとも大きい個体でも居るのかもしれない。

「大きい個体がいるかもしれないと」

「ええそうです。数もどうやが多い。繁殖力が強いにしても多すぎる。これ程の数を引き連れているとなると」

「それでロードゴブリンが居ると」

そのベルギオンの言葉に、茶で喉を潤しながら長老は頷く。

「見たわけではありませんがの。ほぼ確実だと思われますな。」

それ以上のランクであれば一ヶ月も待ちますまい」

「私はロードゴブリンを良く知らないのですが強いのですか？

キリア……さんが討伐に出ようとして止められたとか」

「ええ、若い衆に止めさせました。ゴブリン種の中では中の下位ですかな。」

「一対一ならキリアなら討てる可能性は有りますが……、ゴブリンの長はその群れの中で強い個体を護衛として引き連れておりましてな」

「確か、キリアさん以外は血が薄いのでしたか。それは厳しいですね」

「キリアは確かに魔法も使え腕っ節もありますが――、情けない事に他のワシ等は普通の人間とそう差はないのです。本来ならこういう時、エルフの部隊に救援を求めるのですが」

竜人に付いて詳しく知りたかったが、きな臭い話になってきた。

「それなら今回も」

「そう思い伝令を若い者に行かせましたが……
エルフの街の近くにゲヒル・オーガの群れが出たようでそちらに手を取られております」

「エルフの街に――」

「エルフの部隊は精強での。ゲヒル・オーガの群れでも落ちる事は無いですが、半月は動けないと返答が来ましてな」

「では他の」

その言葉に長老は首を振る。様子に疲れが見えた。

「遠すぎるのです。竜人は元々交流は薄く、離れて住んでおります。交流のあるエルフの街でも近いとはいえませんが」

「そうですか……、ではどうされる御積りで」

「討伐の為の冒険者を呼ぼうにも金も無く、必要な人数の居るグループは北の大森林の奥には来ようとしません。」

広いだけの森で得る物ありませんし、うっかり集落に入り込む
こめば好戦的な亜人もおりますからな」

「……」

「おお、つまらん話をしてしまいましたな。

何、武器くらい備えております。ワシ等も竜に連なる物としてそ
う軽々とはやられませんよ。」

「ですか——」

かなり悪い状況ではないだろうか。

協力相手の救援は無い、冒険者も呼び込めない。

まともに戦えるのは腕が立つとはいえ、女一人——

ベルギオンは嫌な味のする唾を飲み込む。

少しの間沈黙が流れ、ドアから控えめなノックが聞こえる。

「失礼します。姉に伝えてきましたので、戻ってきました」

そう言って姿を現したのはラグルだった。

汚れていた髪や肌は綺麗になり汚れた服を着替え、動きやすい薄
着になっている。

「おおラグル、来たか。ベルギオン殿には刈り入れが終わるまで逗
留してもらったことになったでの」

「あ、そうなんですか？　そうか、今道案内が出来るのは姉だけで
手が空いてないからですか」

逗留という言葉聞いて、ラグルは少し笑顔になる。

旅人が来るのも珍しいだろうし、話でも聞いてみたいのかもしれ
ない。

「うむ。ワシが後で伝えてもいいが、ラグルが言っておくかの？」

「そうですね。私から言っておきます。あれ、どこに泊まる事になったんですか？」

「確か隣の小屋、今あいとるな？　そこにベルギオン殿に使ってもらおうかと思つての」

「あの小屋ですか？　確かに空いてますが、余り掃除もしてませんし……」

「構わんよ。屋根と、あと体に掛ける布か毛布があれば」

ラグルは小屋に止める事を想定してなかったのかいまち乗り気ではない様子だが、

ベルギオンとしては一先ずの宿が確保できた時点で良しとしていた。

場合によっては洞穴を探して、そこで寝たり野宿の可能性もあった事を考えればなおさらである。

「ベルギオンさんがそういうのであれば。寝る広さはありますけど、物置小屋として使う事もあるので本当に綺麗じゃないですよ？」

「それほどか。なら箒があれば貸してくれ」

はあ、仕方ないですね。とラグルはため息をつく。ハキハキと言う子だな。

しかし、先ほど長老とベルギオンの中で漂っていた少し暗い空気は完全に無くなっている。

それは間違いなくラグルによるものだった。

「分かりました。姉も感謝していますし問題は無いと思います。長老も言っていたと伝えますので。話は終わったんですか？」

「ええと、大体は終わりました、かね？」

「ですか。逗留されるのですからまた話す機会もありましょう」

「ええ、是非とも御願います」

「では私に付いてきてください。家まで案内します」

そう言うラグルにベルギオンは付いていき、家の外へと出る。
話を聞く中で、ベルギオンの心の中である思いが生まれ始めていた。

長老の家から5分ほど歩いた所で、木で出来た家と小さめの小屋が隣合っている場所に付いた。

「ここが私と姉の家です。父や母は既に天に召されているので二人で住んで居ます」

「それは……苦勞しただろう」

「姉も居ましたし、竜人の村は皆仲が良いのでなんとかなっています。
畑も姉は力があるので維持できますし」

「そうか」

「ではどうぞ。姉に紹介もしなければいけませんね」

自分から言ったという事は本当に気にしてないのだろう。
しかし村の助けがあるとはいえ女性二人で生きていくのは大変だろう。

（逗留させてもらう間何か手伝うのもいいかもしれないな）

ベルギオンは密かにそう決心する。

「どうしましたか？ 遠慮しなくても良いですよ」

ベルギオンの足が止まっているのを不思議に思ったのか、ラグル

が声をかけてくる。

「悪い。今行く」

ベルギオンはそう言っただけで家の中に入る。

入った部屋には、入り口横にラグルが控えていて、真ん中に女性が一人立っている。

ベルギオンは、その女性の存在感に目を奪われる。

赤く胸まで伸びた艶のある髪。

強い意志を思わせるやや釣りあがった眉。

赤く凛とした目。

服は動きやすいハーフズボンに、絹のシャツと動物の皮をなめして作ったと思われるジャケットを着ている。

胸は大きい、と言うほどではないが細い腰と、相俟ってそれなりにある。

歳は18ほどだろう。肌に張りがある。

妹のラグルはまさに村娘といった感じだったが、逆に姉のキリアはかなり活発な狩人のような印象を与える。

何よりも、存在感が違う。竜人の濃い血のなせる業か。

女性は入ってきたベルギオンに近づき、口を開く。

「キリア・ロティエよ。妹が世話になったね、礼を言うわ。確かベルギオンだった？」

「ああ合ってる。巡り合わせが良かったようだ。俺もあのままだと遭難していたし」

そう言ってキリアは握手を求めてくる。

ベルギオンは女性の手に少しドギマギしたものの、握り返した。
中々気の強いようだ。しかし話しやすい。

ベルギオンもそれに合わせ、緊張していた気を少し緩める。

「姉さん。長老が隣の小屋をベルギオンさんに寝床として使わせて欲しいそうです」

「小屋ね。確かに他に空いている家は今はないか。ベルギオンは構わないの？」

「その質問は三度目だ。全然問題ない」

「なら使うといいわ。掃除の為に道具は貸す。私達の小屋だし私達も手伝う」

「助かる」

「では道具を取ってきますね」

そう言ってラグルは奥へと引っ込んだ。

とりあえず、世話になる場所を掃除しよう。

湯浴み

小屋は寝るには十分な広さだった。

大の大人が二人は十分寝そべれる。

小物は端に寄せて、借りた箒でゴミを外へ吐き出す。

ゴミといっても埃ばかりだ。合間合間で手入れされていたのか、それも少ない。

キリアが水を持ってきて、ラグルが掃いた場所を拭く。

木で出来た内装は見る見る本来の輝きを取り戻していった。

「こんなものか？」

「大分綺麗になりましたね。後で寝具を持ってきておきます」

ラグルもこれなら問題ないのか、ベルギオンの言葉に頷く。

「終わった？　綺麗になったねー、とはいえ小屋には何も無いわ。寝るまではこっちにいると良い」

「いいのか？　女所帯だろう」

ベルギオンがそう言うのと、ラグルがジト目でベルギオンを見る。

「疚しい気持ちでもあるんですか？」

「いや、無いがしかし……」

「さっさと来なさい」

そういつてキリアは手招きした。

相手が気にしてないのに言うのもやばか、とベルギオンは判断し

二人の家に入る。

改めて家に入って中を見る。

余分な物が無く質素ではあるが、生活するのに必要な家具は揃っている。

見た所寝室と思われる部屋以外は一つになっていた。

炊事場は端に置かれている。家もそう大きくないし広く使う為の工夫だろう。

そこで薬缶が火にかけられていた。

真ん中には丸いテーブルにシートが掛けられ、木で出来た杯と急須が置かれている。

竈で火にかけるもの以外は木や竹が多く使われていた。

材質としても悪くないし、周囲に幾らでも材料があるのだからそれも当然の判断だろう。

ベルギオンはそんな事を考えながら、ラグルの引いた椅子に座る。

「茶を入れる湯は沸かしている最中よ。そうだ、少し移動すれば小さいけど湯浴みも出来るわ」

「湯浴みか、いいな」

そういえばラグルも綺麗になっていた。

ラグルの家に風呂がある様子は無かったので、水で拭いたのかと思っただが。

ベルギオンがそう思っていると視線がつい向いてしまったのか、ラグルと目が合う。

じっ、と強い視線が来た。

「何か変な想像してませんか？」

「まさか。案内してくれ」

「いいですよ。使う人で順番にしていって混浴ではありませんが」

「どこから混浴が。いや、入れるだけで十分だ」

そういえば風呂の事は頭から抜けていた。

ベルギオンは毎日入っていたのだ。入れるなら入ってさっぱりと汗を流したい。

「そうね。話をしようと思っていたけど、その後でいいか。湯を拭く布はあるの？」

キリアにそう言われ、ベルギオンは腰に括りつけていた布袋を漁る。

（確か中に……あった）

ベルギオンは布袋から絹の布を取り出す。

装備の材料だが、体を拭く布として十分使えるだろう。

それに女性の使っていたものを使う勇氣も、ベルギオンには無かった。

「これを使うさ」

布は上品な天然の絹で編まれており、キリアはそれを手ぬぐいにするといったベルギオンに、やや呆氣に取られる。

「上等な布ね。勿体無いような気もするけど、まあいいか。

じゃあラグル、案内して上げなさい。今の時間ならまだ人も入ってないでしょ」

「分かりました。邪魔になるので装備なんかは外して置いて下さい」
「ああ」

ラグルの言葉に従い、ベルギオンは手甲や鎧などを外し始める。装備を外す不安が無いでもなかったが、モンスターが居る訳でもないので不安を追い払う。

やや手間取るものの、装備を外し終え家の片隅に押し込める。

「じゃ、さっぱりしてきなさい。その間に寝る準備だけラグルがしておくから」

「姉さん……私がすると言ったのでいいですけど」

「ええっと、うん。頼むわ」

キリアは座ったままひらひらと手を振って見送る。

やや慌ただしくなったが、湯浴みが出来るとなると今まで気にならなかった汗や埃が不快になる。

人間とは現金な物だとベルギオンは少し可笑しくなった。

「どうしました？」

「なんでもない。本当に仲がいいんだな」

「そうですね。姉さんはいざという時頼めますし、よく気に掛けてくれます。」

あれでいい加減な部分もあるのでつい私も世話を焼いてますし」

「お互い上手く支えあっているんだな」

「はい。……それにしても、凄い傷ですね」

薄着になり露になったベルギオンの腕の傷を見て、ラグルはそう言った。

少女が見るにはきついだろう、えぐい古傷もある。

ベルギオン自身には痛みも無いしその傷の自覚は無いが、ゲームとはいえかなり無茶な戦い方でレベルを上げていた。

その断片がベルギオンの体に残ったのかもしれない。

「少し無茶をしていた時期があつてな。特に支障のある傷は無いし見た目だけだ」

「そうですか。命あつてのことです。余り無茶はしないで下さいね」
「分かつてるよ」

そこで会話が途切れる。悪い雰囲気ではない沈黙のまま、少しして目的の場所に着いた。

地面に10cm程度の小さい川が通っており、その上に小屋が建っていた。先ほどの小屋より少し大きい。

川の片方からは湯気が出ている。

「ここです。他に人は居ませんね。

水は流れてますし、魔法石で熱を維持しているのでそのまま入って大丈夫ですよ。

赤く光つてある石がそうですから、触らないようにして下さいね。危ないです」

「魔法石？」

「精霊が宿っている石です。興味有りますか？」

聞いた事の無い物が又一つ増えた。後で聞くとして、今は風呂に入りたい。

「ああ。気になるが後で聞く。それにしても直ぐは入れるのか、ありがたい」

「出たらこの札を裏返しに。帰り道は大丈夫ですか？」

ラグルはそういつて湯浴み小屋の札をひっくり返す。

「覚えたから平気だ。出たら家に向かうよ」
「では」

そう言ってラグルは頭を下げて、岐路に着いた。

それをベルギオンは見届け、小屋へと入る。

小屋には湯気が充満しており、扉を開けた瞬間湯気がベルギオンを通り抜けた。

温かい風にベルギオンはこれは期待できる、と喜ぶ。

脇に脱衣籠がある。床は木だが、真ん中の地面に穴が丸く掘ってあり、石で舗装されている。

そこに小さい川から流れてきた水が入り込むようになっており、溢れた分が反対側へ流れ込む擬似的な温泉のような感じになっていた。

本来ならこれでは水浴びになるところだが、舗装されている一部に赤い石が組み込まれており、見た所それが入ってきた水を温めている。

これなら水は常に循環して汚れも余り溜まらないだろう。

「便利なもんだな」

思わずベルギオンは感心する。しかし、ディエスの世界にこのような物は存在しない。

その事に僅かばかりのショックも受ける。

見た所石鹸等はない。自分で用意するのが決まりなのだろう。ラグルからは灰かに石鹸の匂いがしたので存在はしてる筈だ。

お湯で流せば汗の汚れはすぐ取れるので、ベルギオンは服を脱いで脱衣籠に入れて、絹の布をその上に置く。

そして、恐る恐るベルギオンは湯の中に身を沈めていく。
思ったより深く掘ってあり、石に触れないように座ると胸くらい
まで浸かれる。

「染みるなあ——！」

少し熱いくらいの温度がベルギオンの肌を刺激する。
その染み込む様な感覚に思わず気が緩んだ。

湯に浸かりながら、この世界に来る前を思い出す。
M M O R P G 以外、生きる糧とも言うべき物が無かった時。
つい昨日までそうであったのに、どうにも遠くに感じているとベ
ルギオンは感じた。

（……戻れるのか？ 戻りたいのか？）

親も居らず、未練とも言うべき物は何か無いと思うも、存外思い
浮かばない。

さりとてこの世界で生きる決心はまだ欠片も無かった。
まだ心の何処かでこれは夢なんだ、と思っている部分がベルギオ
ンにはある。

（湯に浸かって、何も考えずこの熱に身を任せよう）

思考がループしそうになった事に気付き、ベルギオンは目を瞑っ
て温泉の心地よい熱を楽しむ事にした。

「行ったかな」

キリアは椅子の背もたれを前面に持つてきて、そこに体を預ける。脱力して、ジャケットがずり落ちかけ、髪は無造作に体に流れる。黙っていれば冷たい綺麗さを持っていた容姿は、そのけだるい格好で大分柔らかくなる。

ベルギオンという冒険者はどのような男か、妹に話を聞いて一度見てみたかった。

無論ラグルを助けてもらった礼を言いたかったのもあるが。

如何に北の大森林が強いモンスターがいない地域とはいえ、一人来るといふのは奇妙な話だ。

それに準備も無く遭難しかけていたという。冒険者としてはお粗末に過ぎた。

そもそも、今の時期エルフの街の方にはゲイル・オーガの群れが来ている。

エルフの街は近くの町と交流があるし、その噂は広まっている筈だ。

此方のゴブリンの群れがいる事は知らなくても、一人で行動するのは賢いとは言えない。

どちらも冒険者ギルドに依頼は通っていないから依頼金目当てとこののも無いだろう。

そんな時に竜人の村の近くまで来るだろうか？

しかし、ゴ布林三体を軽く蹴散らした事から見て多少腕に覚えはあると見ていい。

置いていった装備も決して安物ではない。質の良い二級品位はある。

キリアはベルギオンという冒険者を計りかねていた。もしかすれば、追い詰められてきている現状を覆せるかもしれない。

だが、場合によれば巻き込んで共倒れもありえた。

恩人にそのような事をしたとなれば竜人の名折れだろう。

そのような事をキリアが考えていると、ラグルが家に戻ってくる。

「お帰り。ご苦労様」

「戻りました。顔も緩んで嬉しそうですよ」

「湯飲みが出来るほどの火の魔法石はあんまりないし、というか火の魔法石をあんな使い方してるのうちの村位だろうね。」

「普通は火で沸かすから贅沢だし。湯飲みは出来ないと思ってたんじゃないかな」

「身なりは割と綺麗にされてましたし、感心しました」

聞く話では冒険者は中堅位まではジリ貧かマイナスだ。

身綺麗にする余裕など無いだろう。女ならまだ気を使うだろうけど。

「というか姉さん、その姿勢はだらしないので止めて下さい」

「えー、いいじゃない。楽だし。ねえラグル、貴方はベルギオン。どう思う？」

戻ってきて早々寝室の奥からシートを取り出して来る、勤勉なラグルにキリアは問いかける。

「悪い人ではないと思います。命のお礼をと言ったら普通お金とか、その……、コホン。特に考えず食事と寝床がほしいと言うような人

でしたし」

「目もなんていうかギラギラしてなかったね。遭難しかけてたみたいで余裕があるってほどじゃなかったけど」

「それに私達竜人の事を聞いても、興味は持っても視線は変わりませんでした」

「亜人と言っても私達は見た目一緒だからね。まあ変な目で見てくる奴も居たけど」

その直ぐ後に地面に転がしてたけどね。とキリアは内心舌を出す。

「胆力有りそうだし。力、貸してもらいたいな」

「姉さん、それは」

村の近くに住み着いたロードゴブリンとその取り巻き達。

普通のゴブリンも50は超えていると見ていい。

3匹のゴブリンを追い払うのとは訳が違う。

此方の都合で巻き込んでいいのか、僅かな非難と不安の混じった目でラグルはキリアを見つめる。

（私や他の皆で片が付くならそれがベストなんだけどねー、ゴブリンはそこそこ知恵があるといっても、獣と比較しての話。

もし負ければ男は餌に、女は慰み者にされて繁殖の為の苗床にされてしまうかもしれない。それで生きていても使い物にならなければ同じだ）

交渉の通じない相手である以上、竜人の村には勝つしか手段は残されていなかった。

美人とぶどう酒

ベルギオンは石で出来た風呂から上がり、体を拭く。

汗も疲れも綺麗に流れ去っており、気分もかなり楽になった。

布袋に予備の服代わりになる装備が何着かあったので、それに着替える。

残念ながら、布袋にある装備はそれと唯のナイフが一本あるだけだ。

後は回復アイテムが少しと、筋力を一時的にドーピング出来る薬が残り一回分。

準備を整えて湯浴み小屋から出る。絹の手ぬぐいは濡れているため、肩に下げておく。

ベルギオンはそのまま行きそうになるが、札に付いて言われている事を思い出し裏返した。

「よし」

そして気分良く歩き始める。

足取りは少し軽くなっていた。汗を流した爽快さが、そのまま不安も押し流したかのようだ。

空は青と紅が混じりあい、夕方から夜へと変化を始めている。

途中で見かけた村人たちは村長から話を聞いたのか、気安く声をかけてくれたので手を上げて挨拶を返した。

そういえば、と布袋から回復アイテムであるポーションの入った瓶を取り出す。

薄っすらと青く透き通った液体は、紅い陽の光に当てられて目を奪われるような美しさを醸し出していた。

「効くのかね。これ」

揺らしてみると、とぷとぷと液体の揺れる音がする。

余り手元に無いとは言え、コレが使い物になるかどうかはかなり重要だ。

この世界に売っていればいいのだが。と考えるが、金が無い事を同時に思い出し、ベルギオンは渋い顔になる。

ゲームの世界のようにNPCが販売しているわけではないだろうし、もしあるなら必需品として高く取引されているかもしれない。

「試してみるか。ちょっとだけ」

その場でやろうとしたが、余りにも特異な状況に見えることに気付き、森の近くまで歩いていく。

そしてようやくナイフを取り出し、右手の人差し指の上で軽く引いた。

「痛っ」

少し深く切ってしまったのか、血が溢れてきて鋭く痛む。

その人差し指に、蓋を開けたポーションをゆっくりと垂らしていく。

数滴ほどが傷口に落ちると少しずつだが血が止まり、痛みが和らぎ始めた。

量を少し追加すると、傷口がみるみる塞がっていく。

「使えるな。一度に使えば多少切られても直せそうだ」

ポーションの瓶一つでベルギオンのHPを1割ほど回復できた筈だ。

手元にあるのは5本。實際体をどの程度直せるのかは分わからないが、

単純計算で半分のHPを回復できるのだ。切られても腕の一本は生えてくるかもしれない。

（何だよ腕一本って）

その考えに至ったベルギオンは自分の思考に笑いをこぼす。

まだまだゲームとしての思考が強いのだろう。

実際に切られれば笑えないだろうが。

ベルギオンはポーションを割れないように布で包んで布袋に入れる。

今最も頼れる物の一つだろう。大切にしなければ。

そう考えながらベルギオンは二人の姉妹のいる家へと向かった。

扉をノックすると入っていいよ、というキリアの返事が来たので扉を開く。

テーブルを囲んだ椅子にキリアが座っており、ラグルの姿は無かった。

「ノックはしなくていい。自分の家だと思って使っていいよ」

「分かった、とはいえ客だ。そこまで厚かましくするつもりは無い」

ありがたい言葉だったが、ベルギオンはその言葉をそのまま受け

取るほど図太くは無かった。

「固いわね。なら好きにしなさい」

「ラグルは？ あーっと、キリアさん？」

どう呼んだものか悩み、無難だと思われるさん付けをしてキリアを呼ぶと、キリアに睨まれる。

「やめてよ、さんとか。鳥肌立ったじゃない。こっちは呼び捨てにしてるしキリアでいいよ。ラグルはもう寝てる。

気を張って何時も通りにしてたみたいだけど、疲れていたんでしようね。横になったら直ぐ寝たわ」

「そうか。まだ子供だし怖かっただろうしな」

「割と器量はいいいし大人びてると思うけど、子供扱い？」

「？ 子供だろ？」

「あの子あと二年もすれば嫁に行く年頃なんだけど」

「えらく若い頃に……、こっちの居た処が遅いだけか」

確か日本も昔は男は16までに元服して、近い歳の嫁をとっていた。

以前聞いた話では体が出来始めた頃に早く結婚する事で、家を継ぐ子供を儲けさせる為だったという。

この村では医者も村人だろうし、子供も出来にくいから尚更早く結婚する事が大事なのだろう。

「とはいえ、俺には子供にしか映らんな。顔立ちは整っていると思うが」

「ふうん、まああの子の事はいいわ。ちょっと話をしましょう。他所からの冒険者なんて中々来ないのよ」

そう言ってキリアは炊事場においてあった、膝位の高さがある樽を此方に転がしてくる。

ついでに杯を二つテーブルに置いた。

「冒険者なんだし飲めるでしょう？ 付き合ってよ」

「茶が出ると思っていたが。こんな時間からか？」

「もう夜よ。大してする事も無いし何時もはもう私も寝ちゃうわ」

そう言いながらキリアは樽を開ける。

アルコールの匂いと共に、仄かな甘い匂いが漂う。

色は紫色。ぶどう酒だった。

キリアは杯を直接樽に入れ、ぶどう酒を注ぐ。

「飲むのはいいが、ぶどう酒は余り飲んだ事はなくてな。酔うようなら小屋のほうへ行く」

「潰れたら毛布くらいは掛けておいて上げる」

「そういう話じゃない。女性の居る家で眠るのはどうかという話だ」

「はいはい。妹の恩人がそんな野蛮な人間じゃないって信じてるから大丈夫」

やや茶化すようなキリアの言い方に、これは言っても無駄だとベルギオンは早々に判断した。

元よりどこであっても何時であっても口で男は女に勝てないのだ。

ベルギオンは自分の前に置かれた杯を掴み、ぐっと傾けてぶどう酒を呷った。

日本に居た頃飲んだ物より雑味があるが、アルコールも強くなくやや酸味はあるがすっきりと飲める。

「美味しいな。自作か？」

「ラグルがね。近くにぶどうの木があるから毎年実をつけたらそれを使って作ってる」

そう言ってキリアも一息でぶどう酒を飲み干した。
ん、おいし。と言いながら二杯目をついで口を付ける。

どうやら付き合うしか無さそうだ。ベルギオンは軽いため息を吐き、ぶどう酒を掬う。

アルコールも強くないし、この体も酒には強い様子だ。
酔っ払う事は無いだろう。

「まずは、さっきも言ったけどあの子を助けてくれてありがとう。
貴方がいなければ死んでいたと思うとぞっとする」

「ああ。その礼は十分受けている」

「死んでたら絶対ゴブリンの巣穴に突っ込んでたよ」

「それだけ大事って事だろう」

「そうね。うん。で、貴方の事なんだけど。育った所ってどんな所だった？」

「……、ここよりはずっと平和で、退屈な所さ」

「退屈、ね。そこが嫌で飛び出して冒険者になったの？」

その問いに答える言葉をベルギオンは持っていなかった。

何を言おうともこの世界の常識とかけ離れた物になってしまいうだろう。

そう判断し、キャラクターとしてのベルギオンの記憶を思い出す。
その記憶とベルギオンの感情を混せて話し始める。

「そう、……だな。退屈だったんだ。あそこは。だから、色々な場所を見てみたいと思った」

「思ったよりロマンがあるんだ。それで？」

まだ確信はしていないが、やはり「ディエス」とこの世界は違う。国の名前や、モンスター等もなんとかぼかしながら話していく。合間合間にキリアが質問してきたので、出来るだけ矛盾しないように普段は余り使わない頭を回転させた。

基本的な知識が抜けているので、どこにでも居そうなモンスターの話に限ったが。

子供のグリズリーの群れと戦った事、獅子に追いかけられ命からがら逃げ切った事（獅子はBOS Sだ。そして実際には死んでデスペナルティを受けていた）

鉱山で珍しい石を探した事などだ。

キリアはぶどう酒を飲みながらそれを興味深そうに聞いている。

女性の前で話をする事は決して悪い気分はしない。

ベルギオンは酒の助けもあり、乗り切る事が出来た。

「面白い話だった。私と同じくらいなのに中々いい装備してたから、どう生きてきたのか興味があつてね」

「装備は拾い物みたいなものだ。……流石に飲みすぎたな。これで失礼する」

気付けばかなりの量を飲んでいる。

酔いこそ回っていないが、体の体温が上がっている自覚があった。

「分かった、私も寝る。そうだ、明日ちょっと手伝ってよ。折角の男手だし」

「世話になるし引き受けよう。——じゃあな」

酒に因る暖かさと、体に残った少しの疲れが心地よい眠気を誘う。ベルギオンは家から出て、小屋に入ると敷かれたシーツに身を潜

らせてすぐに眠りに付いた。

鳥達が鳴きながら空を羽ばたいていく音が聞こえる。

ラグルは日が昇り始めて、空の暗さが和らぎ始める頃目を覚ました。

やや肌寒いが、用事を済ませていれば直に昇っていく太陽の光で暖かくなるだろう。

身を起こしたラグルは隣のシーツを見るが、用意した状態のままだった。

姉のキリアはシーツに入りすらしなかったのだろう。

良くある事なのでラグルは気にせず、二組のシーツと毛布を畳んで仕舞う。

部屋へと繋がる扉を開けると、キリアはテーブルに突っ伏して気持ち良さそうに寝ていた。

ぶどう酒の樽は中身が半分減っている。

話をすると言っていたから二人で飲んだのだろうが、姉は一人になった後も飲んでいたのだろう。

手際よくラグルはそれらを片し、水瓶の水を器に移し顔を洗う。

その後ラグルは寝巻きにしていた服を脱ぎ捨てた。

今身に着けているのはショーツだけで、弱い朝の光に照らされた肉体はそれだけで強い輝きを持っている。

気の箆笥から着替えを取り出し、それ等を身に付けていく。

一度胸元を見て、机で押しつぶされ形を変えているキリアの胸元を見る。

何事も無かったように視線を鏡へと向け、身嗜みを整えた。
何時もよりもほんの僅かだけ時間が掛かっている。

「問題は無いですね」

ラグルはそう呟やいて脱ぎ捨てた服を仕舞い、テーブルに突っ伏しているキリアの上半身を引き上げ、横へと倒す。

支えを失ったキリアの体は自然と床へと向かっていき、床へと激突した。

「ぐはっ」

そう呟くものの、未だキリアの意識は覚醒していない。

やや寝息が小さくなったので、少しすればおきてくるだろう。

竜人の濃い血を引くキリアは中々頑丈だ。

起こしていくうちに段々とキリアは慣れ始め、ついにはここまでやっても起きなくなってしまった。

何か行事のあるときは起きるので単に起きるのが面倒なだけだろう。

床に突っ伏したキリアをそのままに、家を出る。

村は森に遮られているので余り風は無いが、澄んだ空気が心地良かった。

隣にある小屋の前に立ち、ラグルは控えめに何度かノックをする。
人の気配はあるのだが、一向に返事は無い。

「失礼します」

そう断って、ラグルは小屋へと入る。
そこにはシーツに包まって寝ていたベルギオンが居た。
寝相などで乱れた様子も無い。

(意外ですね)

昨日話した限りがさつな様子は無かったが、若くても男でしかも荒くれ者の多い冒険者だ。

もっと寝相が悪いものかと思っていた。

難しい顔をする時もあり大分年上を感じていたものだが、眠っている顔は起きている時の少し固い表情も無く、青年らしい健やかな顔だ。

このまま寝かせたいという気持ちもあったが、日の出の内にやることは多い。

ベルギオンが起きた時ラグルもキリアも居なかった、では些か問題がある。

「起きて下さい。朝です」

ラグルはそう判断してベルギオンの体を揺らし、声をかける。
何度か揺するものの、一向に目が覚める様子は無い。

「起きて下さい」

少し強めに揺すると、ベルギオンはシーツを握り締め身を縮めてしまう。

(むっ)

その様子に少しだけラグルは腹が立つ。
仕方なくシーツを剥がそうとすると、握り締めた手は微動だにしない。

挙句後50分、などと寝言を言い始めた。

これは強敵だ。しかしキリアという長きに亘る敵を起こし続けていたラグルに死角は無い。

ラグルは今までキリアを起こしてきた方法を思い出し、適切な技を選ぶ。

シーツから手を離すと、寝ているベルギオンは安心したのか体の力を抜く。

読み通りだった。

ラグルは立ち上がり、右肘を前に突き出し、そのまま軽く飛んで滞空中に体を90度傾ける。

肘はベルギオンの腹へと一直線に落ち、見事にめり込んだ。

「ぐほおっ!？」

ベルギオンの体は噴出した声と共にくの字に折れ曲がり、そのまま脱力した。

「……やりすぎました」

その後起きたベルギオンは腹の謎の痛みに頭を捻るが、その答えを得る事は無かった。

その際のラグルの顔はとても眩しい笑顔であった。

農作業と回し蹴り

ベルギオンは腹をさすりながら、冷たい水で顔を洗う。

起きてから腹が痛い。どうにも理不尽な目にあった気がする。

ラグルに何か知らないか聞いてみたが、笑顔で笑うばかりで答えてくれなかった。

追求しようと思うと、第六感とも言うべき何かが警報を鳴らし怖くなったので止める。

知らない方が良い事もあるのかも知れない。

ラグルが水の入った桶と共に、手ぬぐいを持ってきてくれたのでそれで顔を拭く。

タオルのような柔らかい感触ではないが、滑らかな触り心地で気持ちよい。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

「目は覚めたようですね。起こしに来た甲斐がありました」

「大分起きるのが早いんだな。空はまだ白み始めたばかりだろ」

寝足り無い部分はあるが、早朝独特の澄み渡る空気と太陽が温める前の冷気、腹の痛みはそれらを容易く追い払う。

しかし、これほど早く起こされるとは思っていなかったので少し驚いたのも事実だった。

「陽が落ちる頃に寝て、陽が昇る頃に起きるのは普通ですよ？ 爛れていたんですね」

「人聞きの悪い事を……、確かに夜更かしも多かったが」

「冗談です。昨日は姉の相手をして頂きありがとうございました。すぐ朝食にするので家に来てくださいね」

ラグルはそう言いながらシーツや毛布を畳み、脇へと仕舞う。

「相手というか、酒を飲んで昔話をしていた位だ。朝食を作るなら何か手伝おうか？」

「料理はできるんですか？」

「皮むき位なら出来るぞ」

「……実が無くなりそうなので遠慮しておきます。昔話は少し興味が有りますね、私にも聞かせてください」

「そうか。分かった」

にべも無く断られた。

ラグルはしっかりしているし、任せた方が良さそうだ。

「その代わり後でシーツを干したりするのを手伝ってください。

恩人をこき使うのは心が痛みますが、申し出てくれるなら何の問題も有りません」

「手伝うって言ったのは料理……」

「ありがとうございます」

満面の笑みでお礼を言われる。

幼さが残るとはいっても、可憐な少女にお礼を言われるのは悪い気はしないのは事実だ。

昨日キリアにも手伝うと言っていた事だし、此処に居る間何もしないというのは余りにも二人に悪いだろう。

「……任せろ」

時間が経つ度にラグルが遅しく感じるのは、果てして気のせいなのだろうか。

女性という神秘と謎に満ちた相手に、ベルギオンはしばし考え込むのだった。

「突っ立ってないで、早く来て下さい」

「ああ」

家に入ると、キリアが柔軟していた。

服装も昨日と変わっている。目もきっちり覚めている様子だ。

「おはよう」

「おはよう、朝から柔軟しているのか」

「まあね。体をほぐしておかないと、全力で動いたりすると力が強くて腱を痛めたりするのよ」

そう言いながらキリアは上半身をぐっ、と逸らす。

来ている服は薄着で、ベルギオンからしてみれば目の毒としか言いようが無い。

「こほん」

「お！？、——悪い。塞いでたな」

「いえ、構いません。座っていてください。お湯はもう沸かしてあるのでお茶を先に出しますね」

ベルギオンがどくと、ラグルは炊事場で手際良く準備を始めてしまふ。

その手際の良さに感心しつつ、少し気まずい思いをしながら席に座った。

すぐにお茶を入れたポットと杯が出てくる。

ポットは木ではなく何か金属のような物で出来ていた。

ステンレスが近そうだが、何か違う気がする。

キリアは柔軟を切り上げ、お茶を注いで飲み始めていた。

ベルギオンもそれに習う。

「そういえば今日は、というか何時もどういう事をするんだ？」

「何？ 美人姉妹の私生活が気になる？」

「自分で言うな……、こういった村は初めてだからな。興味はある」
「特別な事はしてないわ。朝から畑を耕して、昼からは男衆は開墾や木の伐採。私はそっちを手伝うかな。

狩りをする事もあるけど、今の時期は採れないからやらないわ。

女は洗濯とか薬草摘み。祭の時くらいよ、何時もと違うのは。それも今年はもう終わってるし」

「そういうものか。開墾や伐採はなんというか、やってみたい気はするな」

キャンプでもそういう経験は出来ないだろう。

村人にとってはそんな気楽な話ではないだろうが。

「力は有りそうだし歓迎するけど、とりあえず畑かな。

刈り入れは終わらしてるから地均ししないといけないのよ。

女二人の細腕じゃ辛くてねー」

「ラグルの、だろ」

「ちえっ。でも辛いのは本当。ラグルは昼から……あー、ラグルは付いてきなさい。

薬草摘みはしばらく禁止になる筈だし」

「分かりました」

昨日ゴ布林達がラグルを襲った事だろう。

湖の近くが薬草摘みの場所だとするとかなり危険だ。

「なあ、あいつ等が住み着いた場所は湖の向こう側か？」

ラグルに聞こえないように、小声でキリアに声をかける。

その意図を察したのか、小さく頷く。

湖から此処まで1時間かかっていない。

奴らのテリトリーが湖の向こうだとしても、かなり近くなってきたのではないか。

この村は途中にあった川で飲み水や生活用水を確保している様子だった。

川まで奴らが来れば、その時点で水が絶たれる事になる。

川以降の道のりはある程度整備されてしまっていた。

勝負を決めるとすればそれよりも早く動かなければ、地の利が完全に無くなってしまう。

半月後にエルフの部隊が動くというが、準備も含めればもっとかかるだろう。

此処とエルフの街がどれほど友好があるのか分からないが、オーガに続けてもし何かあればまず援軍は来ないと思う。

（それに繁殖力が強くて天敵が居ないなら、テリトリーの広がる速度は相当速いんじゃないか？）

「ディエス」以前にプレイしてたゲームでは戦争の指揮をやっていた。

その影響で、此処で戦うならどうするかを考えてしまう。

それまでには此処を発っている可能性は高いはずだ。キリアも畑が終わってまえば手もあく様子。

情が移ったのだろうか。それとも顔見知りになった相手が死ぬのがイヤなのだろうか。

「難しい顔してるね」

キリアはじつ、とこっちを見ていた。

気付けば茶は冷め、朝食の準備はほぼ整っている。

「どうしたんですか？」

最後に皿に乗せたパンを持ってきたラグルは、その様子に首をかしげる。

「なんでもない、なんでもないよ」

「ですか。じゃあ食べましょう。食べ終わったら畑の手伝い御願いますね」

「さ、食べよ食べよ。長老のそこより美味しいわよ」

「それは楽しみだな」

朝食のメニューはトマトの入った葉のサラダにパン、それに芋と南瓜が入ったスープだった。

サラダにはレモンが絞られており、柑橘系の匂いが僅かに香る。

美味しそうだ。

「頂きます」

美味しいかったと思うが、心に渦巻いた不安のせいか余り味わえなかった。

食べ終わった後、ラグルが食器を片しキリアに畑へと案内される。

鍬は家を出るとき持たされた。ラグルも用意が終われば来るとの事だ。

家の裏側を少し行くと、低い柵で覆われた畑が見えてくる。

姉妹二人で維持しているにしては大きい。90?はある。

土地は開墾すれば有り余っているのだから、割り当てとしてはいいのかもしれないが。

キリアの力は相当強いという。この畑を維持していたなら確かに大した物だ。

「よっし、じゃあ耕そう。1からだからそうね、私はこっちからやるからあっちの端から耕してきて。」

浅くじゃダメよ。きちんと土を掘り返してね」

「餓鬼の頃だが経験はある。それじゃ、やるか」

キリアの指差した方向へと歩き始める。

合間で振り返ると既にキリアは鍬を構えて振りかぶっていたところだ。

地面に突き立て、中々深いのに苦も無く土を掘り返して耕している。

土の固さは分からないが、あのペースを維持出来るならそこ等の男より力があるだろう。

指定された場所に付き、ベルギオンも畑を耕し始める。

土はそれほど固くないが、深く入れると抵抗も強い。

しかしベルギオンの筋力なら問題なく耕せる。

久々だった太陽の下での運動に、ベルギオンは夢中になって耕し始めた。

筋肉が軋みを上げ始める頃目に汗が入り、汗だくになっているこ

とに気付く。

体を上げて思いっきり伸びをすると、筋肉が伸ばされて気持ちが良い。

ずっと集中していたから中々耕せただろう。

腕で汗を拭い、キリアの方を見てみると此方よりも3割増しは進んでいた。

（まじか！）

キリアも一旦作業を中断し、此方を向いてベルギオンに手招きしている。

いつの間にかラグルも来ており、座って此方の作業眺めていたようだ。

声をかけられた覚えは無いから、それだけ力が入っていたのだろう。鍬を持って、二人の方へと歩き出す。

二人の居る場所は大きく平らな石が幾つかあり、そこに腰掛けた。どうぞ、とラグルから差し出されたら杯を貰う。

水がなみなみ入っていたそれを一気に口に流し込む。

ひんやりとしており、果汁が入っているのか灰かにレモンの味がある。

美味い。汗をかいた体にはこれ以上無いほどの美味さだ。

「中々進んだね。この調子なら明日には終わるよ」

「邪魔をしないように声をかけませんでした、凄いペースでした」

「大分いいペースだと思ったんだがな。キリアの方が進んでるようだ」

「そっちがいいペースだったからこっちも頑張ったからね。本当は一週間はかけるつもりだったんだけど」

キリアも同じくらい汗をかいており、上着は既に脱いでいる。
下に来ていたのは袖の無いのシャツで、それも汗に濡れていた。

「そのままだと風邪引くな」

「あー、汗でべとべになってる。大分進んだし畑は此処まででいいかな。うーん、昼には少し早いわね」

「もうそんな時間か？」

空を見てみると薄っすらと白かった空は爽快なほど青々としている。
雲も無く太陽も輝いていた。汗もかく筈だ。

「お弁当は作ってきてますよ。でも食べるには確かに少し早いですね」

キリアの着替えと共に、竹で出来た箱をラグルは示す。

「少し時間が余るかな？ そうだ。どうせ着替えるしちょっと手合わせしない？」

「手合わせ？」

「危なくないですか？」

「確かその辺に……あった。これならそこまで危なくないでしょう？」

心配するラグルに、キリアは近くにあった木の枝を二本持つてくる。

枝と言っても直径五センチはある太い物だ。長さは80センチ程。まともに受ければ骨ぐらいは折れるだろうが、武器を使ってやるわけにも行かない。

「いいのか？ 聞いていたように強いなら加減は出来ないぞ。俺もあまり戦いの経験があるわけじゃない」

むしろ殆ど無い。ベルギオンの体と、染み付いた技量だけが頼りだ。

とはいえモンスターが普通に居る世界。体の動かし方を体験するいい機会かもしれない。

「いいよ。審判はラグルがしてね。危ないと思ったら止めればいいから」

「無茶は絶対にしないで下さい。いいですね」
「分かった」

10歩分程度キリアと間合いを取る。

気持ち悪かったので汗だくになっていたシャツを脱ぎ捨てておく。もう一枚のシャツも脱ぎたかったが、女の前で上半身とはいえ裸になるのはどうかと止めた。

向かい合い視線が合う。

（凄い視線だな）

これまで見たどの女性よりも強い意志を視線に感じる。

濃い竜人の血が、人よりも強い存在感をもたらしているのか。

ベルギオンは思わず唾を飲み込む。

「では——始め！」

ラグルの声を聞き、両者は同時に間合いを詰めていく。

10歩分しかなかった距離は一気につまり、ほぼ一足一刀※1になる。

此方が3歩進めた時間でキリアは5歩進めている。見た目は細身で速さはあると思ったが、予想よりも早い。

キリアは右手で木を持ち、此方へと進みながら肩まで振りかぶった後、横一線に振りぬいてくる。

受け流す技量も自信も無い。木の枝を右手で握り締めて、手首を捻りキリアの方へ手の内を向けた。

そのまま力を入れ、7分の力でキリアの斬撃に合わせて振る。

目は完全に追いつけている。体の動きはぎこちないが、それは慣れている所為だろう。

木同士でぶつかる独特の鈍い音が鳴り響く。

それだけで木がやや軋んだ。

（お、もい——！ 弾かれる！？）

右手の力だけでは衝撃を受け止めきれず、思わず左手も木を掴み、力を込める。

両手ならベルギオンの力が優り、衝撃をなんとか受け止めた。

キリアは切り結びでジリジリと押されているのに、左手を使おうとしない。

一度に押し切られないその力は見事だったが、このままなら寸止めで此方の勝ちだ。

そうベルギオンが思った瞬間、キリアははっきり分かるほどに”笑った”

（なんだ？）

そう思った瞬間、今まで対抗していたキリア側の力が一瞬で無く

なり、ベルギオンは込めていた力に振り回されそのまま振りぬいてしまう。

（やられた！ やばい）

キリアは次の動作に入っている。右足を直に左回りに回転。左足は浮いている。

木はもう間に合わない。

ベルギオンは咄嗟に木を捨てて両肘で腹を固める。

その次の瞬間、肘で固めた場所をキリアの左足が蹴りぬいた。

（なんつー器用な）

回し蹴りだ。切り結んだときも感じたが、スレンダーな見た目のどこに力があるのか。

70kgはあるだろうベルギオンの体が浮き、地面から足が浮いた。

そのまま後ろへと飛ばされる。

「そこまでです！」

ラグルの声が響く。

戦う前に間合いを取っていた辺りに吹き飛ばされていた。

ベルギオンの体が反応したのか、綺麗に防御できており痛みは無い。

しかし、見事に引っ掛けられてあっさり武器を手放されてしまった。

（まんまとやられた）

完敗だ。

キリアの右足の踵は少し地面に埋まっていた。
キリアは左足を上げたまま口角を上げている。
その嬉しそうな顔に、悔しさも少し和らいでいた。

※1 一足踏み込めば刃を交える距離

少しずつ立ち込める不安と不穏な影。そして決意

蹴られた衝撃は強かったが、ぶつからずに地面で受身を取ったのでダメージは無い。

お互い装備といえる物は、木以外は無かったのも影響があるだろう。

ブーツならまだしも、鎧で蹴られれば骨が砕けている。

直ぐに立ち上がり、思わず口元が笑った。

「もっかいだ」

「そうこなくちゃね」

それを見てキリアも笑う。

次は同じミスはしない。力で負けていることも分かったのでやりようはある。

そして何よりも、かつて出来ない事が出来る事が楽しい。

（この体ならば、戦う事が出来る！）

キリアも戦いに楽しみを見出すタイプなのだろう。

既に待ち構えていた。

ベルギオンも直ぐに移動して距離をとる。

ラグルはそんな様子の二人を見て、審判を続ける。

やや呆れている様子ではあるが。

「怪我をしたらすぐ止めます。――始め！」

再びお互いが動いた。

二人は時にはフェイントを使い時にはゴリ押しし、相手の防御を崩し相手の攻撃を弾く。

力で負けるベルギオンは力勝負を避けながら攻撃を重ねて相手の隙を付こうとし、

キリアは強引にベルギオンの武器を弾いたり、あえて隙を作る事で誘い込み、乗ったベルギオンの隙に力の入った一撃を加える。

手合わせはキリアの方の木が碎ける5回目まで続いた。

勝敗はベルギオン二勝、キリア三勝。

キリアが三勝になっているのは武器が碎けていなければ、そのままキリアの一撃が肩に当たっていた為だ。

擦り傷こそ多いがベルギオンは受けきる事で、キリアは弾いたり避ける事で一撃を避けた為大きな傷は無い。

「二人とも子供ですか」

ラグルはその様子に呆れつつも、そんな二人の為に水と布を用意し簡単な手当てをした。

「そうだ、魔法を使えるんだよね？」

「使えるわよ。流石に危なすぎるから使わなかったけど。治療出来ないし」

ラグルの目もある。使えとはいえないだろう。

「そうか。少し興味はあったんだが」

少し、どころか実際に目にする魔法というのはとても見てみたい。口元は閉じたままだが、そんなベルギオンの瞳にキリアは気付いたのか小さく笑う。

「目は少し、どころじゃないわよ？ 空に向けてならいいか。疲れるから一度だけ。よく見てなさい」

キリアは汗でべた付く赤い髪を後ろで纏め、呼吸を整えていく。

「＞火は怒りにして生命の輝き。なればその力はあらゆる物を燃やす力である。火炎フレイムく」

何時もより通りの良い声で、キリアは唱える。

文字が進むごとに、キリアを中心に淡く赤い光が舞う。

そして火炎フレイムと言った瞬間、漂っていた赤い光が一度に集約し、火炎の球となる。

キリアと少し離れていたベルギオンは、僅かだが皮膚が火に炙られる熱を感じる。

大きさは両手で包み込むにはやや大きい。キリアが指先を上に向けてると、それに従うように火炎フレイムは

上空へと疾走していった。

燃え盛る火が尾のように引き、やがて上空で見えなくなっていく。

「どう？」

「凄いな……火の魔法か。魔法自体始めてみるが、あの大きさだ。食らったら火傷では済まんな」

少し離れて尚あの熱気だ。直撃すれば黒焦げになる。

ベルギオンの褒め言葉にキリアは機嫌を良くしたようだ。

「火に耐性か耐魔力が無い人だと、すぐ治癒の魔法をかけないとまずいかな。」

小さい頃、冒険者の置き土産でこの魔法が載ってた本があってね。試しに使ってみたら使えたわけよ。

魔法を使えるかは血統で決まるらしいし、私の血の源泉は火竜だから相性が良かったんでしょね」

血統、か。ジェネラルという職は確かMPがほぼ皆無だったし、恐らく使うことは出来ないだろう。

「なら俺は無理そうだな。源泉といったが、それは分かる物なのか？」

「伊達に竜人の村はやってないよ。といっても、石に手を置くと血に反応して色が変わるだけなんだけどね。」

竜人以外が触っても効果は無いけど」

「そんなもののなのか。ラグルは何の竜の血を引いているんだ？」

「私ですか？ 血が薄いのでほんの少し光っただけでしたけど、金色でした。黄金竜だと思います」

黄金竜、なんだか凄く強そうだ。

「黄金竜は種族じゃないからね。竜人となった初代の竜の一体。この大陸の何処かで果てたって言われてる」

「夜でも少し目が利くのと、多少目が良いだけです。力もあれば襲われても平気だったんですが」

「無事に済んだんだから気にしない。それより弁当食べようよ。サンドイッチでしょう？」

「はい。カラシナの種で味付けしてますから、少し辛いですよ」

「少し辛いくらいなら大丈夫だ。俺も食べよう」

ラグルがランチボックスを開けると、箱一杯にサンドイッチが詰まっております、具も葉や芋の他に干し肉が使われていた。

カラシナというところしの材料だ。こういったものは日本と名前の類似点が多い。

体を思いつきり動かした後なので腹も減っており、ピリリとする辛さが良い刺激となり三人で瞬く間に平らげてしまう。

キリアは良く食べる方だが、ラグルも結構食べる。

その食べっぷりに驚くと、良く働くとお腹がすくんです。と窘められてしまった。

よく食べるのは良い事だと思う。それだけ健康だという事だから。

「しかし汗かいちゃったな。早いけど湯浴みしてこようか」

キリアはそう言って汗を吸った服を揺らす。

「服もべとべとですし、洗わないとダメですね。ベルギオンさんの服も洗っておきます」

「悪いな。すまんが上着だけ頼む。俺は川で体を洗ってくるよ。その方が気持ち良さそうだ」

「水浴びも気持ち良さそうね。一緒に行こうか――」

キリアはベルギオンをからかうように言ってくるが、返事をする前に首の根っこをラグルに捕まえられた。

「姉さん？ 冗談も休み休み言わないと。汗臭いのでさっさといってください」

「ちよっと、酷くない？」

「もたもたしていると風邪を引いてしまいます。」

一度家に戻りますから、ベルギオンさんも済んだら戻ってきてく

ださい。そうだ、拭く物がありますか？」

「昨日使った奴がある。ついでに洗ってこよう」

「分かりました。道は看板があるので大丈夫ですね……では」

二人はそう言って家へと戻っていく。

ベルギオンは一人になると、ゆっくりとした動作で少し大きい石を拾い、勢いよく振りかぶって森へと投擲する。

「GuRa a a a a!？」

ベルギオンの力が込められた石は一直線に森へと奔り、何かにぶつかり呻き声が上がった。

その呻き声の元へと、ベルギオンは一気に駆け出す。

石をぶつけられた生き物はゴ布林だった。

頭に石が当たったのかふらふらとしている。

ベルギオンはゴ布林が体勢を立て直す前に近づき、右腕をゴブリンの首に回し、一気に絞め落とす。

大きさはともかく体のつくりは人間に類似しているなら、強引に絞め落とす事も可能なはずだ。

（あんまり抵抗してくれるなよ！）

少しの間暴れているが、大した力も感じられずやがて動かなくなる。

ゴブリンの体の熱が引いていく感覚を右手で味わい、以前のように同様軽く沸く罪悪感をかみ締める。

（嫌な感触だ）

キリアが魔法を使ったとき、それに驚いて僅かだがこのゴブリンが姿を現していたのをベルギオンは見ていたのだ。

魔法を見ていたこいつをそのまま逃がすわけには行かなかった。火というのは強力で分かりやすい。それ故に時間があれば何かしら対策は立てれるのだ。もしということもある。

森の奥深くなら見過ごしていただろうが、森に入って少しなら今の陽の光なら見ることは出来る。

その時にも、今もこの一匹以外は見当たらない。群れで動くのが当然だと思っていたが……

（一匹という事は襲いに来たんじゃない。偵察だ）

ここに偵察に来れるほど勢力が広がってきているという事だ。

よく目を凝らせばキリアやラグルも見つけられた筈だ。

ゴブリンには隠れる技術はなかったし、目もそれほど良くない。

これぐらい近づかないと見えない様子だ。

こいつを始末した以上、もし学習するのなら偵察はもっと手前で数を減らすより力を貯める。

（エルフ達が来るまで半月？　少しは頭を使うが、こいつ等がそれほど待つとは思えない。早ければ一週間もないぞ）

獣は本能で動く。ラグルを襲った時のように勝機を感じたら止まらない筈だ。

畑は明日には終わるという。

準備も含めて明後日には村を発てるだろう。

行き帰りを考えれば、キリアは入れ違いになって助かるかもしれない。

（ダメだ。先が無い）

助かってもしリアは嬉しくないだろう。怒りでそのまま奴等に突っ込むのは考えなくても分かる。

そうでなくともゴブリンが健在で村が機能しなくなれば、キリアでも命の危険がある。

飄々とした部分もある。しかしそれも余裕があつてのことだろう。昨日の夜、偶にキリアの顔は何か悩んでいるかのように真剣な顔をしていたのだから。

必要なとき必要な力があればいいと思つていた。

しかし大人になって、必死に頑張つてようやく必要な時に必要な力があるかどうかという事を実感する。

そして今必要な力がある。

そう心に思うと不思議と不安が無くなり、勇気が湧いてくる。

この気持ちが一時的な物であることは知つていたが、この気持ちを持ち続けることができるのも分かつていた。

（あいつ等を……ロードゴブリンを叩く。この世界はまだ全然分からないから冒険者を続ける必要があるし、逃げてばかりもいられない。）

それにあの二人も死なない）

勝てば、嫌な思いもせずに済む。

何かできると分かつていて見捨てれば、それはもうずっと心に残り続ける。

なら答えは、一つしかない。

それを祝福するかのように、涼しい風がベルギオンを包み込む。
しかし服が汗で濡れているベルギオンにとっては、それはやや寒い。

「風邪引いちゃ洒落にならん。さっと流すか」

死体が見つからないように、少し奥へ進み埋葬する。

こいつ等モンスターは敵だ。いずれは罪悪感無しに倒せないと、何時か痛い目を見るだろう。

ベルギオンは汗で濡れたシャツを脱ぎ、川へと向かう。

川に着いた後は水浴びの気持ち良さについて泳いでしまい、大分時間経った後慌てて帰る。

戻った後にラグルに怒られ、キリアにその様子を笑われるという情けない事になった。

その後キリアとラグルに付いて増地予定の森に行き、村の若い男たちと合流して木を切り根を掘り起こす。

若い男たちといっても8人程度だ。この重労働に耐えられるのがこの8人なのだろうが、次の世代というには少なすぎる。

ゆっくと人口を減らしながら、偶に居つく人を交えて繋いできたのかもしれない。

そしてここまで減った時にロードゴブリンという相手が現れたのだ。

今日の昼、長老の命で薬草摘みも暫く禁止になった。
皆懸命に伐採作業に勤しんでいたが、そう考えると不安を鎮めるために懸命にしているように見えた。

男達は皆気持ちの良い連中で、余所者でしかも若い女の家に（実際は小屋だが）世話になっているというのに、困っている事は無いとか、蜂蜜が余っているから三人で食べろ、等親切だった。

日本では余り人の親切に縁の無かったベルギオンは、内心申し訳が無いほど嬉しかった。

その分を斧に込め、木を切り倒し喝采を浴びる。

ラグルはその様子に凄いです、と感心仕切りでキリアも褒める。ベルギオンは少し照れながらも、木を切りながら何か使える情報はないか、集めていた。

そして何度か休憩を挟んだ増地作業も解散となり、再び家へと戻っていく。

斧での伐採や根の引き抜きは、畑以上の重労働ではあった。

しかし風が良く流れ、作業場所も日陰だったのでそれほど汗はかずにすんだ。

帰路の途中ベルギオンは途中で止まり、その様子に二人は足を止めて何かあったのかと振り返る。

「少し村長と話がしたい。先に帰っていてくれ」

「？ 何か用事でもあったんですか」

いきなりの申し出にラグルは首をかしげる。

「また話をしようと言ってただろう？ 畑も早く終わりそうだし、少し話をしておこうと思ってな」

「姉さんが道案内できるようになれば、外へ案内するんでしたね。——もっと長くいるものと思ってました」

そう言ってラグルの視線は少し下がってしまう。
そのラグルの頭をなで、ベルギオンは慰める。

「そんな顔をするところちも悲しくなる。ラグルは笑った方が可愛いぞ」

「……恥ずかしい事をいいますね。後頭をなでられるのは恥ずかしいと言った筈です」

しかしラグルは撫でられるままだった。

「余り遅くならないでね。ラグルが夕食を三人分作る用意してるから。長老の家で食べちゃうとラグルがかわいそうよ」

「用意はしてますけど、変な言い方はしないで下さい姉さん……」

そして道を分かれ、長老の家へと向かう。

空は少し赤みが差してきたが、まだまだ明るい。

決めた決断を、心でより強くする。

何度か扉をノックをすると以前と同じようにあいとるぞ、と声が出たので家へと入る。

意外な来客に驚いたのか、長老はほんの少しだけ呆気に取られたようだ。

しかしベルギオンの硬い表情に気付き、パイプをふかしながらも神妙な顔になる。

「おやベルギオン殿。どうなされた」

「まずは長老に話しておくべきかと思ひまして。

今日の昼、ラグルたちの畑の近くでゴブリンが居ました。それも一体。

「偵察だと思えます」

村のすぐ近くにゴブリンが居たというのは、やはりショックだったようだ。

長老は銜えていたパイプを落としそうになる。

「な、それは確かなのですかな」

「はい。倒して死体は目立つといけないので少し奥に埋めました。場所は覚えているので掘り返せます」

「そうですか……、ゴブリンは繁殖力は強いが、幾らなんでも早すぎる。」

それに偵察など今までしてきた事は無いですがの。——ロードゴブリンか」

やや青ざめた顔で長老は情報を整理する。

ベルギオンも同じ意見だ。

「多分そうだと思います。ゴブリンは二度見た感じ頭は悪そうですし、

俺が攻撃するまで身を隠してました。長の命令だったと思います」
「……分かりました。若い者に武器を集めさせた方が良さそうですね。」

とは言ってもキリアが持っている斧槍と狩り用の弓以外は斧や鍬しかありませんが。

ベルギオン殿は明日にでもキリアに送らせましょう。巻き込まれてはいかんですからな」

「——その事で来たんです。俺も戦わせて貰えませんか」

その言葉に長老は驚くが、真意を測る為かベルギオンの瞳を覗いてくる。

「貴方は見ず知らずの方だ。

我々が恩こそあれ、貴方には危ないだけで得る物はない。この村にはお礼に出せるような金品もありません。

もし若い娘を寄越せというならお断りを……」

長老の言葉にベルギオンは首を振った。

「何も入りません。このまま襲われるのを知って逃げ帰る位なら、俺は戦いたいと思ってます」

「貴方のような若者が命を無駄にする事はないのですぞ？」

しかし、長老はベルギオンを諫め様と言葉をかけてくる。

「死ぬ気は有りません。一緒に心中しようなどと言う甘ったれた事を言っているのでは有りません」

ベルギオンはそれを聞いても考えは変わらない。逃げる事を自分で拒否したのだ。

その意思は梃子でも動かないつもりだった。

「そういえば無償であなたは襲われたラグルを助けてくれたのでしたな。若いのに立派な方だ」

長老は髭をさすりつつ、ゆっくりとパイプをふかし部屋に煙をたなびかせる。

「自分の心に従っているだけです。それにロードゴブリンに勝てば、

冒険者としての自信にもなります」

「……本来なら心苦しい。ですが、この村のために力をかしていただけというその気持ち、この老骨に痛く染みました。

御協力を御願います。しかし、キリアも含めて狩猟はあれどあれほどの数のモンスター達と戦った経験はありませんでな。どうしたもののか」

いざとなれば無理にでも留まって戦おうと思っていたベルギオンだったが、協力を受け入れられて胸を撫で下ろす。

伐採の時に考えていた作戦があった。

「俺に考えが有ります。上手くいけば、ロードゴブリンを引っ張り出して俺とキリアの二人で潰せるかもしれません」

作戦と三人の思い

ベルギオンの言葉を聞いて、長老は興味深そうに髭を撫でた。

「作戦、ですか？　どのようなものか聞きましょう」

「はい、その前に聞きたいのですが、確かこの村は狩猟も行っていると言いました」

「確かにやっておりますがの。今の時期は獣の多くが移動していて、ゴブリン達も住み着いたのでやっておりますが」

「でしたら、獣の足を止める罠……トラバサミやくくり罠はありませんか？」

狩猟をしているなら、高い確率で罠があるとベルギオンは考えていた。

その言葉に察する物があつたのか、長老は頷く。

「ありますぞ。トラバサミは余り数はありませんが、くくり罠は獲物が踏んだら網や縄で吊るすやつですな？　あれは作ればかなり用意できます」

「良かった。奴らを誘導して罠を仕掛けようと思っています。落とし穴も作れば、かなり時間を稼げると思います。

その間に弓で一方的に攻撃して数を減らしていけば、数の不利はかなり無くせるかと」

（そういえば、奴らは何匹居るんだ？）

長老が確認してから時間も経っているだろう。一度此方から見に行く必要がある。

「罨、罨ですか。確かにゴブリンが獲物用の罨に掛かるというのは何度か聞いたことが有りますな。

村で弓が残っていて狩猟の経験がある者をかき集めれば、20人位にはなると思います。矢は予備が有りませんが、丁度今日伐採をした後です。

木を切り出した後で女衆総出でやれば5日で1000本位は用意できるでしょう。

くくり罨も作らねばなりませんから、もう少し少なくなりますか」

1000本、ゴブリンの数は分からないが、20人分と考えれば一人50本だ。少なくとも800なら40本。

罨で上手く足止めでできれば仕留めるには十分だろう。前提となる罨を上手く仕掛けることが必要だ。

「十分だと思います。下の奴らを一方的に倒せば、必ず長は出てきます。

出てこなければ長の座を失うだけですから。

時間が有りません。早速明日から行動に移したいと思います」

「どうするか悩んでおった所です。異論は有りませんな。明日の朝全員を集め、話をしましょう。

罨に関しては詳しい二人を紹介しますぞ」

この申し出はありがたい。

名前や効果は分かっているても、専門的な知識はベルギオンには無い。

経験のある人たちの力が必要だった。

「助かります。落とし穴は俺とキリアで掘るとして、トラバサミとくくり罨をどうしようかと思っていますところで」

「キリアは力が強いですからうってつけですな。……ベルギオン殿。礼を言います。皆喜ぶでしょう」

そう言って長老はベルギオンに頭を下げる。

ベルギオンは慌てて遮ろうとするが、少し考え無粋だと思いその礼を受けた。

「任せてくれ、と胸を張っては言えません。でも、俺は失敗する気はしません」

「頼もしい。ワシも腕がなってきましたぞ。これから忙しくなる。今日はもう戻って休むと良い」

「分かりました。後もう一つ、奴らの巢穴の場所は分かりますか？」

「ええ、住み着いた当初すぐにキリアが見てきましたの。絶対に突っ込むなど言っておいて良かったと思ったものですな。」

場所は湖から北に20分程度歩いた所です。詳しくはキリアに聞けば分かるでしょう。

思えば、奴らの巢穴が分かったとき薬草摘みを禁止するべきでしたな」

「過ぎたことを言っても始まりません。その分、これから頑張りますしょう」

長老が落ち込むように肩を落す。

しかし、そうも言っていられない。

「――そうですね」

それは長老も分かっているのか、すぐに気力を取り戻した様子だ。

そうして長老の家から出る。

心臓が耳に聞こえるほど音を立てて鼓動を刻んでいた。

ベルギオンはいつの間にか握っていた右手を開くと、じわりと汗をかいている。

自分の言葉でこの村の人たちが動き、戦う事になる。
襲われるのではなく、戦うのだ。

座して待つより戦うべきという思いは変わらないが、言い出したことによる責任は強く強くベルギオンにのしかかる

（やる。やってやる）

両手で顔に張り手をし、痛みと共に気合を入れなおす。

心臓は未だに何時もより多く動いているが、ベルギオンの足は迷い無く姉妹の家へと向かっていった。

ノックをしようとして、キリアに言われたことを思い出しベルギオンは少し悩む。

しかし着替え中だったりすると困るので、やはりノックをした。

どーぞー、とキリアの声が聞こえ、扉を開ける。

「帰ってきたか。思ったより早かったね。

ラグルなら水を汲みに出てるよ。何かあったら悲鳴を上げろって言うってあるから」

部屋に入ると、キリアは椅子に座り、股の間に手を置いて椅子を傾けて遊んでいる。

しかし、緊張の抜け切っていなかったベルギオンの顔を見たのか傾けるのを止め、テーブルに両肘を置いて前のめりになる。

「いい顔してる。男の顔だ。何かあったのかな」

キリアはどこか嬉しそうにしていた。

それを見てベルギオンも残っていた筈の緊張が薄まるのを感じる。

「明日になれば分かる。と言いたいが、キリアやラグルには先に伝えよう。」

俺はゴ布林達を討伐しようと思ってる」

「……正気？ 私が見に行ったときもう50体は居たんだよ。

あいつ等は雑食だからいざとなったら何でも食べる。

獣がいなくても増えるし、きつともう100は超えてる」

キリアの声は、ベルギオンを試しているかのように感じた。
疑うのも無理は無い。男一人加わっても、戦力比はそう変わらない。
い。

「尚更だ。俺の故郷には一宿一飯の恩義という言葉がある。

それに、折角助けたラグルがまた危ないというのも癪に障る」

「恩があるのはこっちなだけだね。そういうの、私は嫌いじゃないよ。」

でもどうする訳？ 幾ら私と貴方がいても、数には勝てないわよ」

「長老には伝えて、明日皆に言う事になってるからそれまで待ってくれ。俺も纏めたい事がある。」

後、力をかけてもらうぞ、キリア」

「勿論。期待してるわよ」

キリアは一人であってもきつと戦う。

その意志の強さは、ベルギオンにとって頼もしい。

そうして話していると、ラグルが桶を抱えて戻ってくる。

「おかえりなさい。ベルギオンさん、戻っていたんですね」

「ああ、さっきな。そうだ、もう少し此処にすることにしたら、手間を掛けて済まんがよろしくな」

「それは構いませんけど、どうしたんですか？　姉さんが洩ったとか？」

「ちょっと、どういう意味よ」

「そのままの意味です」

ラグルの言い分にキリアが噛み付くが、ラグルは桶を置きながらばっさりと切り捨てた。

「なに、ここで一つロードゴブリンを倒して、武勇伝を作っておこうと思ってな」

ベルギオンは素直に言うのが気恥ずかしくなり、やや茶化してラグルに伝える。

すると、ラグルの目が丸くなった。

「本当……ですか？　嘘じゃないですよね？」

「本当だ。それを伝える為に長老の所へ言ってたんだ」

「本当なんだ……」

そう言うと、ラグルは何かを言おうと口を開こうとするが、直ぐに口を閉じる。

何度か繰り返し、顔が真っ赤になって寝室へと走り去ってしまった。

「あの子、普段は冷静なんだけど、歳相応に絵本の騎士様ってやつに憧れがあってね。

嬉しいんだと思う。この状況って、まるで御伽噺みたいじゃない？」

「騎士なんて大層なものじゃない。それに俺一人じゃとても出来ないさ。戦うのは俺じゃない。俺を含めた竜人の皆だ」

それはベルギオンの本心だった。この体になって強くなっても、それはあくまで人間のレベルだ。

「そこで俺が皆を助ける、て言えばカッコいいのに。

硬いしその方が似合ってるか。ラグルは今日は出てこなさそうだし、私が晩御飯作ろうかな」

「大丈夫なのか？」

「貴方に言われると無性に腹が立つんだけど。それでも女なんだから料理の一つくらいできるわよ」

そう言ってキリアは炊事場に立ち、小さい炎をそっとおこして竈に火をつける。

ラグルの汲んできた水を鍋に移し、料理を始めた。

洗練された動きではないが、動作に迷いが無い。

食べれる物を期待しても良いだろう。

派手というわけではないが、存在感のあるキリアが料理をしていると凄いギャップを感じる。

やがて出てきたのは、コーンを潰して煮込んだタマネギと芋のコーンシチュー。

それとスライスされたパンだ。

美味しそうな匂いに、腹がなる。

「ラグルの分は後で持っていくとして、ちょっと早いけど先に食べよう」

「分かった。明日も早いからな、頂きます」

「頂きます」

コーンシチューは素朴な甘みもあり、野菜にコーンの味が染み込んで旨い。

スライスされたパンも食べやすく、スープがほぼ無くなれば残ったパンで掬って食べた。

直ぐに腹に収まってしまう。

「旨かった」

「気に入っていただけみたいで。

用意は全部ラグルがやったから私は煮込んだただけだね。美味しかったなら次にあったとき言ってあげて」

「ああ、分かった。今日はもう小屋に行っておく」

「明日から忙しくなりそうね。おやすみ」

「また明日」

ベルギオンは家を出て小屋へと入り、横になる。

どうすれば効率よく戦えるかを頭の中で考えてながら。

興味があつたこともあり、一時期そういうことに手を出していた。そのとき何を学んだのかを、ずっと考える。

考えが整理始めた頃、ベルギオンは既にまどろんでいた。何時しか、完全に眠り込む。

ラグルはシートに包まり、膝を抱えて丸くなっていた。

顔は少しマシになったが、まだ熱い。

ベルギオンが戦うといったとき、心臓が跳ね上がるほど嬉しかった。

（普通にお礼を言おうと思っていたのに、凄く心臓がときどきして何もいえなかった……）

竜人の村には余り本は無いが、それでも子供用の絵本くらいはある。

ラグルはそういったものを今でもたまに読む。

そういうお話では、お姫様の危機に騎士は必ず駆けつけて助けてくれる。

しかしそれがお話の中だけというのも小さい頃から分かっていた。そう思っていたのだ。

自分を大分成熟してる、と思っていたラグルにとって、今の状態は想像の外だった。

ベルギオンが好きなのか？　と自分に問いかけてみるが、違うと思う。

ずっと手に入らなくて、もうダメだと思ったときに向こうから来たような感覚。

ラグルはこんな感情を持っていた自分に驚き、恥ずかしさやどう言っているのか分からなくなり、家事を放り出して寝室に逃げ込んだのだった。

思い出すだけでまた恥ずかしくなり、ぎゅっとシーツをより強く握る。

そうしているとキリアが扉を開け、夕食を持ってきた。

「……姉さん。夕食作ってくれたんですね。ありがとうございます」
「いいわよ別に。何時も作ってもらってるし。ほら、食べなさい」

キリアが食器を置くと、コーンの良い匂いが漂いお腹の虫が鳴る。
匂いでお腹が減っていた事を思い出すとは重症だ。

「頂きます」

ラグルはそう呟き、パンをシチューに浸して食べる。

「突然走っていくから驚いたわ。……嬉しかった？」

「はい。私は嬉しかったんだと思います。私を助けてくれた人が、
今度は村を助けてくれるって言って」

「思えばラグルもまだ14か。こういう場面に憧れる年頃ね」

「良く考えたら凄く恥ずかしい事をしていました」

「あいつも笑ってたし大丈夫よ。でさ、思い切ったこと聞いていい
？ 惚れた？」

「ぶっ、ちょ、ちょっと姉さんシチューが零れそうになりましたよ
！ 　　とか吹き出しかけました」

キリアの直球な質問に、思わず女として見せられない絵になると
ころだった。

「狙ったもの。で、どうなの？」

「自分でも考えてみましたが、そういう気持ちはありません。

カッコいいとは思いますが、憧れの気持ちのほうが強いと思い
ます」

「精悍な顔はしてるけど、美形じゃないもんねえ」

「そこ等の男よりはカッコいいですよ？ 顔だけ良くても仕方ない
ですし」

「まあね。明日から忙しくなる。戦う為にね。貴女はどうするの？
今答えられなくても、考えておきなさい」

ラグルは目が良いので、狩猟の時は良く弓を使っていた。
多分、この村でも一番上手い。

（でも私は弱い。だから姉さんは考えろって言ってるんだ）

きっとどちらでも、ベルギオンとキリアの二人ならどうにかして
しまうかもしれない。

それでも、ラグルは守られるだけでは我慢が出来ない。

「私もこの村の一人です。戦います」

そう言うと、キリアはにっ、と笑う。

嬉しいとき、キリアがそう笑う事を知っていたラグルもそれに釣
られて笑った。

顔はもう何時も通りだ。

「あいつも寝たし、今日は私達も寝ましょう」

そう言いながら、キリアはシーツを引いて毛布を掴んで横になっ
た。

かと思うとすぐに安らかな寝息が聞こえてくる。

（私も寝よう。姉さん、ベルギオンさん。お休みなさい）

暖かい安心感に包まれて、ラグルも眠りに付いた。

準備・前編

早朝。

本来なら畑仕事などを始める時間に、村人たちが広場に集まっていた。

急ぎで集められたらしく、何かとざわざわと近くにいる者と話したりしている。

そうしている内に長老が現れ、置かれていた台へと上っていく。

「皆良く集まってくれた。寝ていた所を起こされた者もいるだろうが、何分急ぎの事だったのでな。許して欲しい」

長老が話を始めると、村人たちは話を止め、長老の話に耳を傾けた。

「知っている通り、少し前から湖の近くでゴブリンが巣穴を作っておる。

二日ほど前に、ラグルが襲われたのは皆覚えているだろう。

エルフの街に救援を出したが、あちらもゲイル・オーガの群れに手を追われておる」

エルフの部隊が来れない事は、分かっているも何人かが暗い顔をする。

「そして昨日、ゴブリンが村の近くまで来たのを確認した者がおる」
「長老！ それは本当なのか？」

長老の言葉に、先頭にいた壮年の男が堪らず声を荒げた。
その声に長老はゆっくりと頷き、事実だ、と告げる。

「確認したのは、何人かはもう会った事はあるじゃろう。

ラグルを助け今村に逗留しているベルギオン殿じゃ。

昨日の夜、その報告とともにある提案をされた」

「ロティエの家に世話になっている青年か」

「確か冒険者よね」

「一体なんだ……？」

ベルギオンの名が出た事で、静まっていたざわめきが再び起こり始める。

ラグルを助けたという事で否定的な意見こそ無いが、提案が何なのか知りたがっている様子だった。

「ワシの口で言うより、本人の口で言った方が分かりやすいだろう。
ベルギオン殿。ここへ。ワシはこの提案は支持してよいと思っておる」

そう言って長老は台から降り、近くに控えていたベルギオンを招いた。

村人の人数は150人ほど。

若者よりやや歳をとったものが多い。

これ程の人数の前で喋った経験が無かったので、ベルギオンは思わず唾を飲む。

しかしここまで来て今更引き返す事もできず、気合を入れて台上る。

「こほん、ん、殆どの人は直接会うのは初めてだと思う。

今回縁があり、厚意を受けて世話になっているベルギオンだ」

村人たちの反応はまちまちだが、多くは先ほどの提案が気になるのか静かになっている。

「本来なら部外者である俺が、このような場に立つのは場違いであるだろうし、もしかしたら村の問題に口をだされ不快に思う人も居るかもしれない。

しかしこの村が危険に陥っていると聞いて、世話になった以上俺は見過ごす事ができない。

俺は昨日、長老にやつ等の殲滅を提案した」

「正気か？ ただのゴ布林だけじゃないんだぞ」

その言葉に、村人たちは様々な驚きの声を上げる。

その中でも多かったのが、そんな事ができるのか、という疑問の声だ。

「ロードゴ布林が居る可能性が高いのは知っている。数が多いのもだ。

しかし、ここに居る皆に力を貸してもらえれば、俺は勝機があると考えている」

「何をするつもりなんだ？ 情けない話だが、戦える者は殆ど居ない」

「正面から戦う必要は無い。何人かの話を聞いたが、ゴ布林は雑食だが肉を好む。

そして今森には獣が居ない。だからこそこの村に危険がある訳だが、逆にそれを利用する」

ベルギオンはそう言って、布袋に仕舞っていた罌を取り出して村人たちに見せた。

「確実にこの村に来るのが分かっているなら、罾を仕掛けて徹底的に足を止めて弓で一氣に仕留めていく。

罾だけでも数を減らせればいいが、威力の高い罾は用意できない。その分数で補う」

「普通のゴ布林なら、確かにそうすれば数が多くてもなんとかなるか……そのまま突っ切ってくるだろうし」

「しかし、強引に抜けてくるやつが居るんじゃないか？

道全部に罾は張れない、少し迂回されただけでもまずいだろう」

ベルギオンの言葉に肯定する者、否定する物で意見を交わしている。

「弓を引く者の守りには簡単な柵を作って、近くに俺とキリアが入るつもりだ。

他にも斧や鍬でいいから何人か居て貰いたい……。

ゴ布林達を仕留めていけば、必ず長のロードゴ布林が出てくる。

それを弓で弱らせて、俺とキリアの二人で討つ」

「それなら……あんたとキリアは危険だが、そのまま戦うより安全に思えるな」

「その分の罾と、矢が足りないんだね？」

「弓を引くだけなら俺にもできる。これはいけるんじゃないか？」

否定的な言葉はやがて無くなり、どうすれば良いのかという相談があちらこちらで始まる。

「ここで反対があるものは申し出てくれ、俺はこれからやつ等の巢穴を見に行くが、もしかしたら思った以上に時間が無いかもしれない。

少しでも反対があれば間に合わなくなる可能性がある。矢と罨はまず作らないとどうしようもないからだ」

「いや、やろう。俺たちはずっとこの村で育った。この村が壊されるのも、今更他所へ行くのもごめんだ」

「これでも竜人の血を引いてるんだ。ゴブリン達に負けたんじゃ先祖に申し訳が立たないよ!」

反対を申し出る者は居ない。

結局の所、何かをしたかったのだが何をすればいいのかを迷っていた人が多かったのだろう。

「いないようだな……。今回の事で必要な物は長老に紙に書いて渡してある。

本来なら畑や用事の時間を潰す事になる。すまない」

「村があつてこそだ。あんたが謝る様な事じゃない」

そう頭を下げると、若い男はベルギオンを労う。

ベルギオンはそれに対し、もう一度頭を下げた。

台から降り再び長老が台へと上がると二度手を叩き、大きくなり始めた雑談を一度止める。

「皆、静まってくれ。一度解散とする。食事や用意を済ませ、もう一度ここに集まって欲しい。

仕事を割り振るでの。そうじゃ、カルックフとスノラマはここに来ず、罨を仕掛ける場所を探してきてくれ。

後でベルギオン殿と相談せねばならん。狩りに慣れたお主なら問題ないだろうが、危険を感じたら引き返すのじゃぞ?」

「おう、任せな」

「罨とは、腕がなるのう」

そして、村人たちは朝食や道具を取りに皆家へと戻っていく。
カルックフとスノラマにベルギオンは挨拶し、二人も一旦家へと
戻った。

広場に残ったのはキリアとベルギオンのみ。

ラグルは準備の為先に家へと戻った。

昨日は様子がおかしかったが、今日はいつもどおりに戻っている。

「それじゃ行ってくる」

「偵察、私も付いていこうか？」

「――いや、二人だと目立つ。特にキリアは髪が赤いからな。森の
中では隠れるのは無理だろう」

「確かに目立つわね……」

「暇が出来たら。一応村の周りを見ておいてくれ。」

来ないと思うが、様子を見られると厄介かもしれん」

「分かった、気をつけて。武運を祈る。それと、道に迷わないでよ」

キリアはベルギオンの胸をトン、と叩く。

「戦う事がないようにしたいものだがな」

そう言っベルギオンは湖の道へと歩き始めた。

村人たちによって草が抜かれた道を歩いていき、川に差し掛かる。

川の大きさは2mと少し。橋を落しても渡りにくいものの、行き
来出来ないというほどではない。

流れも穏やかだ。

もう少し時間があれば上流で水門を作って押しとめ、水の無い溝
を歩いてきたやつ等を押し流せたのだが。

作り方から考える必要があるし、諦めるしかないだろう。

川を渡り、獣道以外道という道の無い場所を慎重に歩いていく。十分ほど歩いていると、変化の無かった風景に違いが出てきた。

（果実や食える植物を殆ど見なくなったな。根こそぎ食われているのか）

木などはそのままだが、ここまで良く見かけた食物は視界から消えている。

ゴブリンたちの活動領域に既に入っているのだ。

足に真剣を集中させて、なるべく音を立てる草や植物を避けて移動していく。

ゴブリンを見かけたら、身を潜めて居なくなるのを待つ。

目印としてキリアに教えてもらった大きな枯れ木を見つけ、その近くで目的のゴブリンの巣穴に付いた。

元々は山の一部に出来た洞穴だったと聞いたが、ゴブリン達が住む時に拡充していったのか洞窟のように広がっている。

入り口ではゴブリン達がたむろし、外から帰ってきたやつらは食料を運び込んでいる。

（持ち帰っている食料は少ないな。この分だと既に増えるペースの方が食料の調達より優ってそうだ）

しばらく身を潜めて様子を見てみるが、ゴブリン達は籠のような物を背負っているモノの、どいつも半分も集められていない。

体長が1mに満たないゴブリン達でも背負えるような籠に、だ。

（さっき通ってきた道を見る限り、川までの食料を食い尽くすのは三日位か？

こっちに村があることはもう知っているのだし、肉を求めてくるだろうな。

罾は出来れば明日には仕掛け終わっておきたいか)

やがて入り口のゴブリンが増え始めたのを見て、ゆっくりとベルギオンは後ろへと下がる。

出来るだけ音を立てないようにして、巣穴から離れていく。

(出来ればロードゴブリンを見ておきたかったんだが。あの数に見つかるتماずい)

来た時の道を辿りながら戻っていくと、罾の場所を見に来ていたカルックフとスノラマの二人に出会う。

二人も村へと続く道の食料が食われている事に気付いており、どうするか考えていたようだ。

「川から奥はもう危険です。橋を上げて時間を稼いで、村から川への道で迎え撃つしかない」

小さい声でそう促す。この一帯はもう罾を仕掛ける間に見つかる危険が高すぎる。

「やつらめ。ここで潰さんといずれ戻ってくる獣も全部食い尽くすな」

「好き勝手やってくれるのう。舐められたものなのう」

壮年の二人は憤りを隠しきれていない様子だ。

しかし経験豊富と長老が言うだけの事はあり、ベルギオンより見事に足音を消している。

三人はそのまま川の方へと引き返す。

「橋はもう上げておこう。他に橋は無い。ここに見張りを立てておけば少数なら大方防げるだろう」

「だなぁ。長老には戻ったとき伝えるかのう」

「分かりました。手伝います」

橋を渡った後、三人で橋の端を持ち、川の底にはめ込んだ木を外して、村側の方へ引っ張り上げる。

ゴブリンが無理やり泳いで来た時の為に、一度ばらしておく。

（配置する見張りは弓の使える人間なら敵を削れて一石二鳥だな）

「さて、戻りながら罠をつける見ておくか」

「まずは落とし穴かのう？ お前さんとキリアの穰ちゃんの二人で掘るんだろお。三つかねえ」

「作りすぎて間に合わなくなったり、後々困る事もありそうなので、それ位ですね」

三人は周囲を見ながらアレコレと話している。

丁度村へと入る道は緩く坂道となっており、村の入り口を低めの柵で覆えば、かなり一方的に弓で攻撃が可能だ。

落とし穴の目印も弓の届く位置に調節する。

穴の中に杭を仕込む積もりだが、運良く外れて穴を登って来たやつは弓の餌食になる。

落とし穴で警戒させて足を鈍らせ、更に落とし穴を避けるとトラバサミやくくり罠を踏むように予定していく。

「なるほどな。落とし穴の周囲に別の罠を仕掛ければ、より長く足止め出来るという訳か」

「こういうやり方もあるんだのう」

遠距離武器の射程と罠の組み合わせは、元の世界ではゲームだけでなく史実においても重要とされていた。

特に今回は此方が一方的に遠距離で攻撃できる。

数だけでは戦いに勝てない事を、ゴブリン達に叩き込む事になるだろう。

そして村に戻ると、早速総出で木や紐の加工が始められていた。皆の士気は、とても高い。

準備・中編

村に戻った三人は、見てきた状況を長老に報告する。

「見た所やつ等は、この村に続く道の食料をかなり食い尽くしてます。あの様子なら、三日後にはゴ布林達が動くでしょう」

「予想よりも速いですな……、皆は作業を始めておりますので。調整があれば任せますぞ」

カルックフとスノラマ、長老と別れ広場の様子を見る。

村の広場では、村人達が準備に忙しく動いていた。

くくり罠に使う紐は手馴れたおぼさん達が担当している。

ラグルもそこで手伝っていた。

「どんどん薪持ってきて！ 紐は乾くまで時間が掛かるからじゃんじゃん煮ていくよ！」

「分かりました！」

植物の蔓を大量に用意し、皮を剥いで茹でる。

茹でた物を干すと縮まって強度が増し、多少のことでは切れなくなる。

石を組んで作った即席のかまどに火をつけて、大釜に熱湯を沸かし蔓の皮を剥いで入れていく。

茹で上がれば竹で作った物干しへと干す。

それをひたすら繰り返し返していく。

「今日中に仕掛けを作り終わるぞ。用意するのは50個だ！」

「こんな量を作るのは初めてだな」

その隣では手先の器用な人たちが、紐をくくりつける仕掛けを編んでいく。

竹を加工して長方形にし、食い込みやすいように下側を尖らせる。仕組みは少し穴を掘った場所に仕掛けを限界まで打ち込み、穴から出ない位まで上に引き抜く。

その後穴を木の枝等で隠す。

対象が踏んだ瞬間に竹と足が穴に入ると仕掛けが作動する。

輪になった紐が引っ張られて、その紐が足を縛って足止めするのだ。

埋まったとき簡単に抜けないように、弁をつける工夫も行っていた。

少し離れた所で矢を加工しているのは、力のある男たちだ。

伐採した木を運び込み、作る矢の大きさに合わせて斧で切り分けていく。

切り分けた木の皮を剥ぎ、薪を割る要領で割っていく。

「一個一個は使えるなら多少雑でもいい。数を用意するんだ」

「家畜の羽じゃ足りんな。確か代用できる葉っぱがあった筈」

細くなっていけば鉋で割り、1センチ程度になったらナイフで削って矢の形に整えていく。

仕上がった物は先を尖らせ矢尻とし、反対側に葉を使って作られた矢羽を取り付けて矢になる。

くくり罠が終われば、手の空いた者から矢の作成に入る。

この様子なら、三日後にはある程度の数は確保できるだろう。

それらを見た後、弓を使える者を何人か集めて見張りについて話

し合う。

見張りにつくものは最低二人。

出来た矢のうち20本を持ち、交代制にした。

ゴブリンは昼行性とのことだが、念の為夜も見張りを立てることにする。

「一匹二匹なら退治するんで？」

「その位なら見張りで対処してもいいが……、大事なのは危険を知らせる事だ。複数来た時点で引いてくれ」

「分かった。順番はこれでいいんだな？」

もし見張りで対処できない事が起ければ、直ぐに笛を鳴らす事とした。

その後は罠の仕掛けだ。

くくり罠がまだ準備できていないので、トラバサミを先に仕掛ける。

見えないように、草のある道の脇へ間を空けて仕掛けた。

トラバサミの数は10個。

これに掛かればそれだけで無力化できるだけに、もう少し欲しかったが無い物はどうしようもない。

村人が踏まないよう、仕掛けた位置に目印として木を刺しておく。これからゴブリンを退治するまで、道を行き来するのは見張りとお水汲みの人員だけだ。

徹底すれば問題は無い。

トラバサミが仕掛け終わると、キリアを誘って二人でシャベルを持ち、落とし穴を掘り進めて行く。

落とし穴はトラバサミを仕掛けている範囲だ。

作動した後、その穴を迂回する奴がトラバサミに引っかかる。

「どのくらい掘る？」

「余り深くなくていい、ただ入り口を狭めて奥を幅広くする。少しでも上りにくくなるように」

「広くなくていいの？ 一気に数を落せると思うけど」

「広くしすぎると道を塞いでしまうからな。トラバサミも一度きりだし、ルートを変えられるのは不味い」

「そういうもののなね」

入り口が狭いと、手が引っ掛けにくくなり余計に力が必要になる。当然這い上がるのも遅れ、いい的になるだろう。

地面は少し硬いが、少し掘り進めると柔らかくなり、キリアの力もあり順調に掘り進める。

ゴブリンの背丈が80センチ程だった。

1m半程度の深さまで掘り、其処から幅を同じ長さまで広げる。入り口を狭めているので一人しか穴に入れず、一人は掘って一人は土を引き上げる事で掘り進めた。

余り一度に落せる広さではないが、発動した後も敵にとっては迂回しなければならぬ障害物になる。

そうしていると昼ごろには三つとも掘り終わった。

いいペースだ。

穴からキリアが這い出てくると、二人の姿を交互に見てため息をつく。

全身が汗だくになり、そこに泥がついて体が黒くなっている。

「お互いドロだらけね」

「ずっと穴を掘っていればな」

「気持ち悪いし、一度流したいわ。湯浴みより水浴びがいいな……。
この後も一緒にやるんだし、一緒に行きましょう」

「おい、冗談は……」

「服は脱がないから一緒にいいでしょう？ 服の汚れは洗わないと無理だけど、体に付いた土汚れは水浴びで十分だし」

「本気か？ 確かに時間は惜しいし、俺もこのままじゃ気持ち悪いのは確かだが」

「ならさっさと行きましょう。ほら」

キリアはベルギオンの背中に回ると勢いよく押してくる。

ベルギオンも流石に折れ、少し経った所で自分の足で歩く。

そうして川に移動した二人は川へ入り、体に付いた泥を落す。

「これは気持ちいいな。疲れを忘れそうだ」

火照っていた体が、水の冷たさで一気に冷やさる。

更に汚れが落ちていき、清々しい爽快感を味わう。

ふとキリアのほうを見ると、着ていた服が肌に張り付いている。

透けてはいないものの、体のラインがはっきり現れていた。

それを恥ずかしげも無くさらしているキリアを直視できず、なるべく見ないようにベルギオンは顔を洗う。

「そんなそっぽ向かなくてもいいんじゃない」

「あっち向いてるから、服を簡単に洗って絞ってくれ。それに濡れたままだとしたくない」

「分かったわよ。大げさねえ」

そうしてさっぱりとした二人だが、きっちり後でラグルに怒られる事となる。

戻った後は、弓を射る場所に柵を作る。

支柱となる太い木の杭を間を空けて二本打ち込み、そこに釘で板

を打ち込んでいく。

高さは1mで、下から潜れないように間にも板を挟む。

食事はラグルが芋で作った団子を摘まんだ。

そうしていると、あつという間に時間が過ぎていく。

陽が落ちると共に、作業が一時中断される。

何人かは残って作業をしたいと言ったが、暗くなっている時に作業すれば怪我の元にもなる。

疲れているときは尚更だった。

それよりは疲れた体を休め、次の日に備えた方がいい。

そうベルギオンが説得すると、残った人たちも納得したようで帰宅していった。

「解散か。それじゃ戻る？」

「いや、少し仮眠をして見張りを変わろうと思う。皆見張りには慣れていない筈だ。疲れてるだろうし」

キリアはそれを聞くと、右手をあごに持っていていき何か考えている。

「付き合うわ」

数秒ほど考えた後、意外な事をキリアは言った。

「疲れてるだろ？」

「それは貴方もでしょ。こっちはまだ体力に余裕があるくらいよ」

「俺は言い出した人間だからな。それ位はやるさ」

「だからこそ貴方が倒れると困るのよ。ましてゴブリンにやられたら、皆士気吹っ飛ぶわよ」

付き合わせるのは悪いと考えたベルギオンは止めようとする。
しかし、キリアはそれを難なく押しのけた。

「……そうだな、頼む。俺は一度寝てくる」

「分かった。私は武器を引っ張り出しておくわ」

疲れきった体を引きずり、ラグルに会うと少し経ったら起こしてくるよう頼む。

小屋へと入ると汚れた服を脱ぎ捨て、転がるように寝転んだ。
次の瞬間にはもう寝入っている。

ラグルに揺られて起こされ、水で顔を洗って眠気を振り払う。

三時間ほど寝ていたようだ。

外はもう真っ暗だった。松明無しでは歩くのも難しい。

装備を体に付け、剣を携える。

数日振りに備えた剣は、ずしりと重い。

その重さがしつくりと来る感覚が何とも不思議だった。

小屋から出ると、キリアが武器を持って待っていた。

服は身軽なズボンにシャツを着ている。

その上から肘当てや鎧を着込んでいた。

いずれも軽い革が使われており、防御よりも動きやすさを重視しているようだ。

キリアの長く赤い髪と合わさって、優雅な雰囲気さえある。

そして何よりも目を引くのは、ハルバートと呼ばれる斧槍だ。

(でかいな)

キリアの背の高さは165センチ程。それよりも更に30センチは長い。

槍の穂先に斧頭、その反対側に突起^{ピック}が取り付けられていた。柄には綺麗な装飾が施され、先端の刃の部分は美しい金属の輝きがある。

一目で見て、見事な業物だと分かった。

「いい武器だな」

「一応竜人の村に伝わってる秘宝みたいなものかな。

頑丈さは折り紙つき。魔法を真正面から叩き伏せた人も居たらしいけど、あくまで噂ね」

ラグルはそんな二人に何か言いたそうだったが、気をつけて下さいと見送ってくれた。

二人で連れ添って、見張りをしている川へと移動する。

「罾を踏まないように気をつけろ。くくり罾はまだ仕掛けてないがトラバサミはもう仕掛けてる」

「分かった。暗いとはいえ、一目じゃ分からないわね」

落とし穴は今は落ちないように板をしているから問題は無いが、トラバサミに掛かれれば怪我で暫くまともに動けなくなってしまう。

見張りの場所にたどり着くと、若者二人が弓を離さないようにしながら火を囲み座っていた。

しかしやはり緊張からか、かなり疲れているように見える。

「見張りを変わろう。弓は借りていいか」

「ああ、あんたか。すまんが頼む。眠ってしまいそうだった所だ。弓はまた明日渡してくれたらいい」

「キリアも来てるのか、助かる。弓は俺も置いていく」

若者二人は少し疲れた足取りで村へと戻っていった。

「あんまり弓は得意じゃないんだけど。貴方は使える？」

そう言いながらキリアは弓に矢をつがえ、向かい側へと構える。その姿勢は堂に入っていた。

「持った事はある。当たらなくても牽制にはなるだろう。」

俺たちはいざとなれば武器で倒せばいいさ」

「なにそれ。まあ分かりやすいけど」

キリアは弓を置いて焚き火に手をかざした。

弱々しくなってきた火に、その辺の枯れた木を入れて火を強める。木が火の熱で弾ける音が周囲に響く。

キリアの顔が焚き火で照らされると、その美貌が更に映えた。

「不思議な気分。こんな時間に外でこんな事やってるなんて」

「俺もこういうことは初めてだな。」

今日は来なかったようだが、明日から小競り合いが始まるかもしれない」

「不安？」

「心配しているだけだ。見張りは無茶はしないように言っているが、一番敵と近いからな」

「なるほどね。明日には罨は仕掛け終わるし、矢も数はまだ少ないけど用意できた。」

後は時間との勝負になるのかな」

順調、と言っている状態だ。

それでも途中何があるかは分からない。

ベルギオンはそう思い、気を更に引き締めるのだった。

偶に何かを話しながら、何事も無く太陽が顔を出し始めて空が白んでいく。

焚き火は既に消していたので少し寒いくらいだ。

しかし意識を常に保つのが難しいほど睡魔がある現状では、その方が助かっている。

キリアは其処までではないが、うつらうつらとしていた。

ほぼ一日力仕事をした後に、少し休んで後はずっと起きていたのだ。

意識があるだけでも驚きだろう。

眠ってしまわないように緊張感をなんとか絶えず持ち続け、直ぐ射れる様に弓を手放さない。

そうしていると、早朝の見張り番が交代にやってくる。

「来たぞ。後は任せて寝るといい」

「……頼む。割と限界だ。今日辺りからゴブリン達が顔を出してくると思う。話したとおりに――」

「いいから戻れ。あんた目が今にも閉じそうだぞ」

「私も眠い。……眠い」

「ほらキリアも戻れ。帰りに罨踏むなよ」

ベルギオンとキリアは幽鬼のように揺れながら村へと戻る。

心配して迎えに来たラグルが、二人の顔をみて少し引いていた。

ラグルの助けもあり無事に家へと辿り着くと、玄関で眠りこけてしまう。

ラグルの力では寝室まで運べない為、少しだけ引きずって二人に毛布を掛けた。

「おかえりなさい。お疲れ様でした」

眠る前に見たラグルの顔は、綺麗な笑顔だった。

準備・後編

太陽が最も輝く午後の時間に、ベルギオンは息苦しさで目が覚めた。

首に何かが絡まっけていて、それがゆっくりと締め上げていたのだ。呼吸に支障さえ出始めたとき、寝惚けた頭が慌てて回転を始める。腕や足を動かそうとしても、ビクともしない。

首も固定されていて、辛うじて動かせる手先で拘束している物を触る。

明らかに人間の感触だ。それにこの柔らかく滑らかな感触は女だろう。

目を開けて見ると何も居ない。締め付けている奴は後ろで此方を羽交い絞めにしているのだ。

背中に胸らしきものが当たってはいるが、正直それどころではない。

そうしている内に更に締め付ける力が強まり、首の筋肉では抵抗できずゆっくりと気道が狭まっていく。

何故このような状態になったのか分からないが、急がなくてはならない。

（これは、いかん。死ぬ）

締め付けている人間に何度かタップし、状況を知らせるが全く反応が無い。

かろうじて細く気道が確保出来ているが、既に必要な酸素を取り込めなくなっている。

なりふり構わず、今出せる精一杯の力を指先に込めて抓る。

それに反応して、一気に締め付けていた力が増した。

「——ぐ、おお……」

今度こそ完全に気道が塞がれ、顔に血が溜まる感覚さえ感じられる。

意識が薄れ始めた。

恐怖と勇気により更に苦しくなる事を承知で、全身に力を込め動かそうとする。

しかし、それ以上の力で締め付けられたベルギオンは、抵抗さえ出来ずゆっくりとまた夢の世界へ引き戻された。

（これが俺の死か……）

九死に一生を得たのはそれから5分後の事だった。

「ほんとごめんね」

「息が出来るってこんなに良い事だったんだな……」

キリアがベルギオンに両手を合わせて謝っている。

ベルギオンを落としたのはキリアだったのだ。

意識を失って直ぐ、ラグルが物音を聞いて駆けつけて助け出してくれたとの事だった。

眠っているキリアを起こす為に何かしたようで、キリアの頭には小さいたんこぶが出来ている。

「ああ、いや、死ぬかと思ったが生きているからな。

今回のように一緒に寝ることは無いだろうが、次からは勘弁してくれ」

「挟みやすくて、ついやってみたいで。ごめんなさい」

「気にしてない。しかし力では本当に敵わない」

関節を固定されていたといっても、あの時どれだけ力を入れても本当に体を動かせなかった。

この細い身体の何処にあんな力があるのか、未だに疑問だ。

（確か、超人体質という言葉があったな）

筋密度と骨格が普通より発達して、常人より遥かに力が強かったという。

改めてベルギオンはキリアの体を見る。

「な、なに？」

しなやかさは感じても、筋肉の盛り上がりは見られない。
力を入れた場合はどうなるのだろうか。体重も気になる。

ベルギオンは考え込む余り、キリアの二の腕を揉んだり触ったりしてみる。

そうすると柔らかいが、見た目よりも張りや押し返す力がある。

（不思議だ）

「何なの？」

そのベルギオンの行動に困惑しつつも、意図の読めないキリアは頭をかしげる。

くすぐったい様で、やや口元が動いていた。

「……変態だったんですか？」

ベルギオンが我に返ると、少し照れたキリアと冷たい視線を向けているラグルが居た。

その後出されたスープは、具が少なかった様な気がしてならない。ラグルは笑顔に戻っていたが、背筋が引き攣るような笑顔だった気がする。

食べ終わると、外に出て作業を始めている人たちに挨拶をする。くくり罨は既に完成して、カルックフとスノラマの二人が仕掛けてくれたとの事だった。

二人に会って仕掛けた場所などを聞くが、流石に年季のある二人で上手く配置してくれている。

「50も仕掛けるのは初めてだが、なんというか爽快だったわ。奴らゴブリンに同情するぐらいにな」

「弓は使えんから様子は見れんが、罨に掛かる様を見てみたいのう」

これで残りは矢を増やし続ける事だけだ。

聞いてみた所、既に300本は出来ているという。

今日中に800本に届くだろうとの事だった。

村人たちの士気の高さが、予定より早い生産に繋がっている。

広場を回りながら、見張り以外の弓部隊となる18人を集めた。

「見張り以外はこれで全員だな」

「はい」

「……ラグル、いいのか？」

「大丈夫です。私もこの村の一員ですから」

その中にはラグルもいる。

ベルギオンは始めは驚いたものの、危険だという事はラグルも分

かっていた。

それにラグルは一度決めた事は、そう簡単に変えないことはもう知っている。

ベルギオンは説得を諦め、承知する。

集まった皆には、指示に必ず従ってくれるように頼んだ。

「指示の事だが、戦い以外でも他の事で経験があると思う。

例えば猫なんかではバラバラに動くようでは獲物が逃げるだろうか？戦いも同じだ。いくら戦力があっても上手く運用できないなら無いのと同じになる」

これは実体験から得た経験則だ。

仕事でもそうだし、多人数のゲームではどれほど簡略化してもこういう事は必要になる。

一部を除けば、人間は統率された群れで動いてこそ真価を発揮するものだ。

「まず指揮系統を決めよう。実際に戦う場に居る人間で組む。

第一に俺とさせてくれ。一連の事を言い出したのが俺だからだ。

言い出しておいて投げっぱなしになんてしないし、ある程度こういった経験があるから指示はできるという判断だ。

異論はあるだろうか」

「無い。あんたが居たから戦う気になれた。あんたの言葉に従うよ」

「賛成だ。罨の事といい、見た目は若いが中々経験豊富なようだしな」

この提案は最悪蹴られる事を考えていたベルギオンは、好意的な言葉に頭を下げる。

「助かる。次に俺が居ない場合はキリアとしたい。

ゴブリンが違うルートから来る場合、迎撃に俺かキリアが動く必要が出てくる。

特に俺が動くなら代役が必要だ。奴らを相手に立ち回れるのは俺とキリアだからな」

とはいえ、ベルギオンが実際戦ってどこまでやれるかは少し疑問がある。

（バスターソードを振り回せば時間を稼ぐくらいはできると思うが……）

「そういう経験は無いんだけど、大丈夫？」

「ある程度は決めておくから大丈夫だ。キリアの場合はそこに居る安心感もあるからな」

「それならなんとかなるかな」

キリアが頷く。

キリアがこの村で一番強いのは周知の事実だ。

これは異論も無く決まる。

「次に弓部隊のまとめ役として、ラグルとしたい」

「私ですか？　――勤まるんでしょうか？」

「ああ、勤まると思う。ラグルの理由だが、まず目が良い事。次に判断力があること。そしてこの村で一番の弓の名手という理由だ。

俺は一応弓を引く事はできるが、得意とはいえない。

弓に関しての判断は経験のある人間の意見が欲しいからな」

「必要な事なんですね。……分かりました。やります」

ラグルはしっかりと頷いた。

本当ならラグルのような子供に背負わせる責務ではないが、他の

人間では連携が取れない場合がある。

ラグルなら数日見た様子で信用出来る。

「確かにラグルならいざとなっても頼りになるからな」

「しっかりしとるし、大丈夫じゃろう」

これも反対意見は無い。

この姉妹は村人たちに信頼されているのだろう。

「さて、これで指揮系統は決まったな。

次に弓部隊は全員で20人居るが、5人ずつで4つの班を作る。
班長は相談の上決めてくれ。まとめ役のラグルは班長兼任だ」

そう言って4グループに分かれてもらう。

しかし、不思議に思っている人間が殆どだった。

「4つに分ける意味は？」

「まず、全員で一斉に射る訳ではないからだ。

相手が来るルートが分かっている、それも広くない。

だから交代制にして手の空いている側は補給し、射る側は打ち続ける」

効率の問題だ。

一度に大量に撃つより、間を空けないことのほうが今回は大切だとベルギオンは考えている。

「それなら二つでもいいけそうですが」

「二つでも勿論いけるが、一工夫しようと思ってな。

さて、班が出来たな。左から順番に1. 2. 3. 4と番号を振る。
あと補給要因として何人か別に来て貰うつもりだ。彼らは5とし

よう。

で、だ。1班と2班はセットで動いてもらう。3班と4班もな。ここで大事なのは、1班と3班には接近してくる敵を最優先で討って貰う。

2班と4班は罠に掛かった奴からだ。

接近してくる奴が増えたら切り替える必要があるが、それは指示者が判断しよう」

ベルギオンの言葉に、村人たちは考えたり相談している。幾つかの質問に答えるとベルギオンの意図が伝わっていく。

「つまり役割が違うってことか？」

「全員が近づく敵を撃つても勿論効果はあるが、死体を盾にされる場合もあるし、折角罠に掛かっているんだ。

当たりやすくて狙い撃ちにできるからな。異論はあるか？ 今なら相談できる」

「ない、かな。聞いた感じ良さそうに思える」

「それに関してではないが、矢の練習と連携を少しやってみたい」

若い男が発言する。

他の者も練習は積みたい様子だった。

（久々に弓を持つ人も居るんだよな。ならやった方が良い）

「それ也需要だな……、矢を回収できるようにして的を作ってみてくれ。

連携は何度か声をかけてやってみれば感じは掴めるだろう。

俺も近くで体を動かしておくから、何かあればいってくれ」

「分かった。よし、板を作って早速やってみるか」

そうしている内に見張りが交代の時間になり、二人が移動し引き換えで二人戻ってくる。

中年の男とそれよりやや若い男の二人だ。

「川の向こうはどうだった？」

「ゴ布林達がうろつき始めてますわ。

大抵一匹二匹でうろちよろしますが、弓を構えたらとんぼ返りですな。

偶に此方に来ようと飛び込む奴も居ますが、あれはまさに良い的ですわ」

「なるほどな……分かった、ありがとう。ゆっくり休んでくれ。起きたら幾つか決めた事があるから、此処にいる人から聞いてくれ」

「了解ですわ……さっきから眠くていけねえ。先に失礼させてもらいます」

相して見張りの男達は家へと戻る。

此方に攻撃の意思があることは相手も理解しただろう。

一度離れ、腕っ節は強いが弓が使えない男達を集める。

伐採の時に居た男たちが殆どで、7人ほどになった。

二人は弓部隊の補助をしてもらう事として、残り五人にはいざゴ布林が来たとき避難している村人の護衛をしてもらう事にする。

戦いが始まれば村で一番大きい倉庫に老人と女子供が入り、倉庫の入り口を背に男たちが集まる予定だ。

そこを更に守るのがこの五人という事になる。

「時間を稼いでくれるだけでもいい。俺かキリアが来るまで持ち応えてくれ」

「任せてくれ。やつ等は倉庫に一匹も通しはしねえ」

一対一ならこの五人なら勝てる相手だし、抜けても男たちで囲めば大したことは出来ないだろう。

しかし、それ以上のことが起きる場合もある。

此方も戦いの際、何かあれば笛を鳴らすようにし打ち合わせをする。

村人全員が移動する事を考えると避難は不可能だ。

確実に守りきり、尚且つ群れを滅ぼす。

夕方まで、それぞれが一心に今出来る事をやる。

弓部隊については混乱が無いように場面ごとに幾つか打ち合わせをしておいた。

陽の光が赤くなる頃、見張り以外全員を長老が集めて、話を始める。

「さて、皆この二日、良く頑張ってくれた。

始めワシは二日で何ができるのかと、不安に狩られた瞬間もあった。

だが経ってみれば戦う用意は十分整っておる。

ワシは生まれて以来味わった事の無い興奮を感じている。皆はどうか」

「俺もそうだ、なんだか怖いというよりワクワクしちまってる」

「村の一大事を自分たちで守ろうってのは、なんだか気分がいいもんだ」

広場に集まった村人たちは興奮覚めやらぬまま声を上げる。

「うむ。思えばワシらの祖先達は、自らの存在の為に巨大な敵たち

と戦ったのだ。

ベルギオン殿の助けがあったとはいえ、その血を受け継ぎそれを行えることは竜人としての誇りじゃろう」

「なんで諦めてたのか。他所から来た冒険者に教えられるなんてな」「全くだな。あの坊主には礼を言わなきゃならん」

「先ほどまで見張りをしておった者達の言では、途中から一切姿を見せなかったとの事だ。

……明日、奴らは来るじゃろう。ワシ等を餌と思うとる奴らに、しっかり教えてやらんといかん。

今のワシ等に手を出せばどうなるかを」

「そうだそうだ！」

「俺たちは勝つ！」

村人たちは疲れがあるはずだが、気力が充実している。

この勢いなら、負けない。

そして迎えた次の日。

倉庫への避難は済み、弓部隊の用意も完璧だ。

矢は800本用意できており、落とし穴も板をどけて折れやすい木で蓋を作り、薄く砂をまいて見えなくしている。

太陽が高く上り、日差しが強まり始めた頃……、ついに川の方から連続で三回笛が鳴る。

群れと思わしき数で移動中の合図だ。

見張りは走ってこっちに向かってきているだろう。

大きく息を吸い、此処に居る全員に向けてベルギオンは叫ぶ。

「全員、すぐに敵が来るぞ！ 作戦は話したとおりだ！ 冷静に、

確実にやれば勝てる！」

「応！」

それに答える村人達。

「1班、2班は矢を番えて直ぐ打てる用意を！ 見張りが走り抜けたら撃ち始めます！」

ラグルの声が響くと共に、100を越すゴブリンの群れの先頭が視界に入り始めた――。

ゴブリン達との交戦

ゴブリンの集団より手前に、見張り二人が走ってきているのが見える。

足の速い者に行ってもらったので、ゴブリン達に追いつかれる様子は無い。

加えて罾の位置を完全に暗記してもらっていた。が、罾地帯ではどうしても足が鈍るだろう。

一手打つ必要がある。

「ラグル。見張りに当てないようにゴブリン達へ撃てるか？ 当てなくても驚かせれば良い」

「いけます。……すう」

ラグルは息を吸い、矢を番えて弓の弦を引く。

ラグルが使っているのは長弓ロングボウという弓だ。

弓の上手さから、特別に村の職人がラグルへ作成したらしい。

大きさは140センチはあり、ラグルの力では連射は出来ない。

他の者が使っているのは、それに比べて小さい複合弓コンボジットボウだ。

「二人ともそのまま真っ直ぐ走れ！ 下手に横に動くと当たるぞっ」

見張り達は辛うじて声が聞こえたようで、走りながら小さく頷いている。

限界まで引き絞られた弦は一切の緩みが無くなり、綺麗な姿勢でラグルはその弦を放した。

動いたのは矢と弦を持っていた指先だけ。動作に一切のぶれが無

い。

放たれた矢は静かに風を切り、見張り二人の間をすり抜けていく。そして一番正面にいたゴブリンの頭へと、吸い込まれるように中^ある^{たる}。

ゴブリン達は突然の攻撃に動揺し、勢いが緩む。

その間に見張りは罨地帯を抜け、一気に加速して此方へと合流する。

(100メートルは離れていたんだが、よく当たるな)

^{ロングボウ}

長弓の射程は50メートル程度と聞いたことがあるが、見事な腕前だった。

「GuRa a——!!」

ラグルの一撃で氣勢がそがれたように見えたゴブリンだが、雄たけびを繰り返すと再び勢いを取り戻す。

地響きのような音を鳴らし、固まりとなって此方に向かってきた。その先頭が最初の落とし穴へと到達する。

数匹が盛大な音を立てて、落とし穴へと落下していく。勢いを止まれず後続も何匹か落ちた。

落とし穴の中には竹で作った剣山がある。

最初に落ちたやつ等は仕留めただろう。

「矢を放て! 落とし穴に落ちなかったやつを狙え!」

落とし穴に驚き、止まったやつから弓で討ち取る。

ラグル以外は百歩穿楊とはいかないが、10人が続けて撃つ事で敵の数が減っていく。

罾を迂回しようとしたやつらがトラバサミやぐくり罾に掛かるが、それでも強引に突っ切るやつが出てくる。

「想定内だ。2番目の落とし穴に掛かるまで1班は先頭を減らし続けろ！ 2班は罾に掛かった奴だ！」

間を空けず雨のように降り注ぐ矢、はゴブリンを容易くハリネズミに変える。

それでもゴブリン達は此方へと進む。

飢えか、欲か。モンスターとはいえ、凄まじいまでの執念といえる。

「……ロードゴブリンはまだ来てないのか？ ラグル、見えるか」

見る限り普通のゴブリンばかり。

ラグルは一矢放ち敵を仕留めた後、矢を番えながら返事をする。

「居ませんね……、しかしゴブリン達の速度が緩んでいませんから、後方には居ると思います。」

この弓の数を見て、森を盾に移動してきてるのかもしれない

「っ、やはり少しは頭が回るのか」

ゴブリン達が2番目の落とし穴に差し掛かる頃、1班と2班の矢筒が空になり、すぐさま後ろに控えていた3班、4班と入れ替わる。このペースなら3番目の落とし穴に来る頃には、ゴブリンは半分も残っていない。

3番目の落とし穴を過ぎればぐくり罾が一気に増える。集団で接近される事はないだろう。

そうしていると、森が僅かに揺れているのが見えた。

「GuRu……」

森右方向から僅かにゴブリンの声が漏れる。

それにキリアが反応し、一気に走り寄ってハルバートの先端を声の方向へと突き刺した。

悲鳴と共にゴブリンが倒れこむ。

「森から抜けてきたか、俺とキリアが抜けてきた奴らを潰す。5班も武器を持て！」

少数ではあるが、森からやって来るゴブリンを倒す為にベルギオンも前に進む。

既にキリアはハルバートを振り回し、4体目を倒していた。

凄まじい勢いに血風が撒き散っている。

キリアの赤い髪と合わせ、此处が戦場でなければ幻想的といったも良い。

あれなら右は抜かれない。

弓の射線上に出ないように道から逸れて左へと進むと、やはり此方からもゴブリンが抜けてきた。

振り下ろしてきた棍棒を避け、膝蹴りで敵の腹を打って吹き飛ばす。

すぐに来た次のゴブリンを、両手で構えたバスターソードで袈裟切りにした。

血が手を濡らす。生き物を切る生理的嫌悪を、歯を食いしばり噛み殺す。

刃についた血を除ける為振りぬくと、血が地面に叩きつけられる音が響く。

「来い！ 逃げないならいくらでも叩き切るぞ！」

そうしてベルギオンもゴブリン達を倒していく。

やがて三つ目の落とし穴が発動し、矢の少なくなった3・4班が下がり1・2班が前に出てくる。

この段階になれば3・4班も補充が済み次第戦列に加わる。

ロードゴブリンがこのまま出てこないか、もしも居ないならこのままゴブリンを倒しければ此方の勝ちだ。

数が無ければロードゴブリンもこの火力だけで押し切れる筈……！

「――！ 来ました、ロードゴブリンです！」

ラグルが大声を出して指を指すと、明らかに大きいゴブリンが此方へと向かってきている。

普通のゴブリンは背丈が80センチほどだが、ロードゴブリンは140センチはある。

筋肉は一目で分かるほど盛り上がっており、右手に持っている石斧で打ち付けられれば鎧の上からでもダメージを受けるだろう。

周囲には普通より体の一回り大きいゴブリンが5体。

違うのは大きさだけではない。

「盾に鎧だと……」

ロードゴブリンは胴体・足・肩に石の鎧を着ている。

周りのゴブリンが持っているのは分厚い木の盾だ。

重量からか歩く速度こそ遅いものの、あれでは矢が通らない。

ロードゴブリンには鎧以外の部分は効くだろうが、あの筋肉では痛みを与える程度。

それも木の盾で防がれる。

ラグルの鋭い射撃で盾を持つゴブリンを一体倒すが、次から警戒されて盾に防がれてしまう。

「奴らは打っても無駄だ、こっちに来るまでに普通のゴブリンを――」

そうベルギオンが言いかけた所で、甲高い笛の音が響いてくる。

「笛の音……このタイミングで襲撃だど!?!」

村からの笛に弓部隊が動揺し、矢の勢いが弱まる。

（阿呆か俺は！ 一番最初に取り乱してどうする。こういうときの事も考えていただろうが!）

動揺して叫んだ自身を叱り、ベルギオンは迷いを振り切る。

「怯むな、大丈夫だ！ 笛が鳴ったならまだ大事になってない。俺が向かうから此処の敵を始末してくれ!」

「ここで一体でも多く倒す事が私達の役目です。後ろは任せて矢を撃ってください」

ベルギオンに続き、ラグルが皆に激励を飛ばす。

その声が効いたのか、弓部隊の動揺は収まって勢いを取り戻した。

それを見届けたベルギオンは近寄ってきたゴブリンを切り倒し、キリアへ近づいて声をかける。

「キリア、村には俺が行くから此処は任す。魔法を使う裁量は任せる」

「分かった。とっとと片して帰ってこないと、こっちは全部やっちゃうわよ？」

「それならそれで楽でいいが。無理はするな、最悪下がってくれ」

キリアはそれに手を上げる事で反応し、再びハルバートでの蹂躪へ戻る。

ベルギオンは柵まで戻ると、バスターソードを鞘に戻して予備の弓を持って声をかける。

「予備の弓を一つ借りる。頼んだぞ」

「あんたこそ。村には女房が居るからな。頼むぜ」

「分かってる。死人は出さないさ」

そしてベルギオンは村の中心へと向かい、走り出す。

後ろではロードゴブリンが三番目の落とし穴のあった場所を越え、くくり罠を力で強引に破り進んでいる。

戦っている皆を信じ、ベルギオンは笛の鳴った倉庫へと一心不乱に走った。

5分も経たないうちに、ベルギオンは倉庫へと着く。

そこにはゴブリンと揉み合う男たちの姿があった。

死人こそ出ていないようだが、怪我人が数人隅で治療を受けている。

ゴブリン達の数は一五匹。男達も踏ん張っているが劣勢だった。

やや離れた所に居るゴブリンに向かって走りながら矢を放つ。

走っている衝撃で少し狙いはそれたが、うまく足に当たる。これでは動けまい。

他は誤射の可能性があり、ベルギオンは止む無く弓を地面に落と

してナイフを装備する。

男に攻撃しようと背を見せているゴブリンを、後ろから首を狙って突き刺す。

「GuOo!？」

悲鳴が上がるが、ナイフをより深く刺すとそれも無くなる。ナイフを引き抜き、次のゴブリンへとナイフを走らせた。その一撃を受けたゴブリンは鮮血を撒き散らしす。

「来たぞ！ 良く耐えた！」

男たちは駆けつけてきたベルギオンの姿に安堵を浮かべる。近くで肩で息をしていた男に状況を聞いておく。

「重体の奴はいるか!？」

「足や腕を殴られた奴は居るが、悪くても骨にヒビくらいで済んでる」

「上出来だ、後は俺が叩く。ゴブリンの気をそらし続けてくれ」
「分かった！」

近づいてきた敵を更にナイフで倒す。

ナイフなら身軽な分、バスターソードよりも相手をしやすい。

感触の悪さはバスターソードとは比較にならなかったが。

とはいえ安物のナイフだ。もう血と脂肪がこびりつき始めている。
後2・3体で使い物にならなくなるだろう。

やがてナイフが切れなくなれば、バスターソードを引き抜く。

「離れろ！ 巻き添えを食うぞ！」

バスターソードの長さは1メートルを超えている。

小さいゴ布林相手では、近くに人がいれば勢い余って当たる可能性が高い。

男たちが引いた事で、ゴ布林達の標的がベルギオンへと変わる。ベルギオンを見るゴ布林達はよだれを垂らし、獯猛な目をしている。

「やらせるかよ。ここはお前らの楽園じゃあ無いんだ」

切れなくなったナイフを左手で投擲し、近くに居たゴブリンの右目に突き刺さる。

それと同時に周りを囲み始めていたゴ布林が襲い掛かってくるが、ベルギオンは両手でしっかりとバスターソードを握り、右足を軸にバスター・ソードに重心を傾けて回転する。

バスターソードは見事に円を描いてゴ布林達をなぎ払い、残ったゴ布林は4匹。

獯猛さは影を見せ、ベルギオンに恐れをなしている様子だ。

ベルギオンが一步足を進めると、ゴ布林はその分後ろへと下がる。

既に状況は決定していた。

ゴ布林達の後ろから、もう一匹のロードゴ布林が出てくるまでは――

森を抜けてきたのか葉を纏い、ゆっくりと此方へ寄ってくる。

ベルギオンの後ろに居た男達が息を呑む声が聞こえた。

「伏兵ときたか。本能か経験か知らんが、畜生にしてはよくやる」

現れたロードゴブリンは幸い材料が足りなかったのか、石斧以外は普通のゴブリンと大差の無い装備だ。

しかし此処には弓の援護は無く、正面から戦うしかなかった。

普通のゴブリンを含め5対1。

入り口から援軍は、あちらがロードゴブリンを倒す合図が来るまで呼べない。

（嫌な汗が流れてるのが分かるな）

後ろに居た男たちが加勢しようと此方に来るが、ベルギオンはそれを止める。

「いいから下がっている！ あれで殴られれば助からんぞ」

ロードゴブリンの武器に当たればベルギオン以外はお仕舞いだ。ベルギオンは武器を構えながら、焦っていく心臓を宥める為にゆっくりと深呼吸する。

「Ru A———！！」

対してロードゴブリンは高らかに吼え、殺意を漲らせた目で睨んできた。

そして、笑った。明らかにベルギオンを、他の男達を嘲笑する笑いだった。

それに釣られるように周りのゴブリン達も笑い出す。

上から見下ろすような、不快極まる笑い声だ。

「眼中に無い、そう言いたいのか。良い事を教えてやる。戦いは調子に乗った奴から死ぬんだよ！」

ベルギオンはゴブリン達にそう叫び、咄嗟に地面に落ちていた斧を蹴り上げる。

それを右手で持って、回転するように手首にしなりを効かせて放り投げた。

斧は勢い良く回転し、二体のゴブリンを仕留めて地面に突き刺さる。

ロードゴブリンがそれに気を取られた僅かな合間で、ベルギオンは間合いを詰めて斬りかかった――

VSロードゴブリン

川から村へと続く道は、至る所にゴブリンの死体が広がっている。それでもまだ脅威は無くなっているはいない。

キリアはハルバートの先端に付いた血糊を、横へ振りぬく事で剥がす。

村の事はベルギオンに任せるしかなく、どうにかしようと思うなら此方を片付けてからになる。

弓の攻撃により、ロードゴブリンと護衛以外は完全に後ろへと下がっている。

しかしその弓部隊が敗走すれば、すぐさま勢いづくのは確実だろう。

キリアは柄を地面に叩きつけ、仁王立ちする。

（どうしたものかな。

あの親玉を何とか引きずり出したい所だけど、あんなにガチガチじゃ食いついて来なさそう）

護衛はロードゴブリンを囲むように移動しており乱れが無い。無理に前に立てば弓の攻撃が止まってしまい本末転倒だ。

こうしている間にも、弓部隊へとゆっくりと接近されている。

（ここが使いどころね）

キリアは目を瞑り息を吸い上げ、ロードゴブリンを見据える。そして詠唱を始めた。

「火は怒りにして生命の輝き。なればその力はあらゆる物を燃やす力である。火炎^{フレイム}く」

キリアの前方に火球が出現する。

ベルギオンに見せたものよりも一回り大きい。

魔法による消耗は目に見えない精神力を大きく削るが、かなり楽な戦いが出来ていた分力は余っている。

とはいえ二発目は流石に持ちそうには無い。

狙いを護衛ゴブリン達に定めて火球を操作する。

振りかぶる右手に火球も付いていき、右手が一気に振り下ろされると火球は勢い良く飛び出す。

突然の炎に敵は動揺し纏めて火炎^{フレイム}の餌食となる。

（これでやれたならいいんだけど、そうはいかないわよねえ）

見た感じ護衛のゴブリン達は全滅した様子だが、火の中で見えたロードゴブリンは煩わしげに顔を顰める。

ゆっくりと石斧を振りかぶり、勢い良く振り下ろした。

重い風圧が音を立てて地面へと叩きつけられ、火炎^{フレイム}が風圧だけにかき消される。

その風はキリアにも届き、赤い髪がたなびいた。

「火に耐性ありか。嫌になるなあ」

その上魔法を力技で掻き消す芸当付きだ。

それでもモンスターの中では最下層なのだから、堪ったものではない。

しかし意図した成果は十分にある。
盾は無くなり、後はちまちまと矢でいたぶれば……

「っげ！」

なんとロードゴブリンは今さっきまで燃えていた護衛の死体から、
使える盾を見つけると左手に装備してしまった。

あれでは体を丸められては殆ど当たらなくなる。
一対一に持ち込むしか無さそうだ。

「弓を止めて！ あいつは直接私がやる」

「姉さん……分かりました。皆さん今のうちに矢の補給を。すぐ撃
てる体勢で待機してください」

ラグルが皆を制止して弓を止めつつも、臨戦態勢でこっちを見て
いる。

ハルバートを構えキリアは息を吐く。

先ほどの攻撃でロードゴブリンもキリアを標的と決めたようだ。
体ごと此方に向け荒い息を吐く。

「GuRuRu……」

ロードゴブリンの目は明らかに欲情の念もあった。

（もてる女は辛いっていうけど、もてるならもう少しマシなのがい
っての）

キリアは心の中で毒付くと、足に力を込めて駆け出す。
元々早さには自信がある。

あのような重い装備を付けた木偶が相手なら押し切る。

ハルバートを巧みに動かし連撃を放つ。

素早い攻撃にキリアの臂力が加わった一撃だ。

ロードゴブリンは木の盾では防がず、器用に体を逸らして全ての攻撃を石の鎧にぶつけられた。

そのお返しとばかりに石斧を繰り出し、キリアはそれをハルバートの中心で受ける。

「うっわ！」

僅かだがキリアの足が地面から浮く。

すぐに地面に足を着けて強引に勢いを殺すが、受けきる積もりで腰を落としていたのに吹き飛びそうになった。

力を甘く見ていたわけではないが、押し切れると思っていた考えを修正する。

加えて鎧の隙間を狙って撃ったつもりだったのだが、思ったより器用だ。

体力勝負で勝てると思えない。

長引くと不利になる。

（頭を使わないとダメね。そういうのはあいつの方が得意そうなんだけど）

舌なめずりしながらキリアはハルバートを握りなおす。

（ベルギオンならどうするか？ ラグルならこういう時どう攻める？）

キリアは考えながらロードゴブリンの攻撃を受け流す。

受け流しは我流の為か、完全には殺せず少し手が痺れる。

直撃よりはマシだと無視した。

「頭が痛くなってきた。考えるのはやっぱり人に任せたほうが良いわ。」

斬るのも突くのも防ぐなら、もう叩きつけるしかないじゃない」

キリアは迷いを吹っ切ると、ハルバートを両手で掲げ円を描くように回す。

ロードゴブリンはその攻撃に危険を感じ取ったのか、石斧を振ってくるがキリアは重心を後ろに傾けて紙一重でかわす。

前に体を戻す勢いと共に、回転させたハルバートをロードゴブリンの頭を目掛け担ぎ下ろす。

ロードゴブリンは首を横へ傾ける事で攻撃を肩に逃がすが、強い衝撃にたたらを踏む。

キリアは防がれる事を予測しており、当たる瞬間に強引に腕をしならせハルバートを引き戻す。

その勢いのままくると右回りに回転し、ハルバートの刃をロードゴブリンの腕目掛けて切りつける。

「AaGaa!？」

勢いの残っていた一撃はロードゴブリンの右腕を切り落とした。

キリアはその後軽く飛んで間合いを開ける。

ロードゴブリンは痛みと驚きで喚きながらキリアへと突進してきた。

武器の石斧は切り落とした右手が握ったまま。

左肩を前面にし石の鎧で体当たりをするようだ。

キリアは正面から敵を見据え右手でハルバートの底近くを持ち、左手で突起手前を持つ。

そのまま力を溜める。

突進してきているロードゴブリンは更に勢いを増してくるが、それでもキリアはまだ動かない。

「これで終わり！」

力の込められていく四肢の筋肉が少しだけ盛り上がりを見せ、キリアが右腕を突き出すと共に引き絞られた。

キリアの全力が込められた突きは、先ほど叩きつけた肩の鎧部分目掛けて直進する。

お互いの勢いさえ加わった結果石の鎧は砕け、ハルバートはロードゴブリンの体を貫通した。

「——っかはあ、きつつう」

力を出し切ったキリアは、立つ事も難しくそのまま脱力して崩れ落ちる。

その隙に近づこうとしたゴブリンはラグルの矢により始末される。それらを見ていたゴブリン達は、少しばかり名残惜しそうにたむろしていたものの、ゆっくりと下がっていく。

ラグル達は弓を構えて居たが、その姿が見えなくなるとキリアへと駆け寄り、膝の上に抱く。

「姉さん！ 生きてますか！？」

「いや生きてるって。疲れたっていうか力は入らないけど」

「良かった。攻撃を受けてる様子は有りませんでしたけど、嫌な倒れ方でしたから」

「あんな力入れたの久々だったわよ。……こうしてる場合じゃないんだっ」

力の入らぬ足に手を添えて踏ん張る。

「無茶です!」

ハルバートとラグルの助けでようやく立ち上がった。
しかし、足が痙攣して歩こうとすると力が抜ける。

「足が震えてるじゃないですか……無理です。休んでください」
「――全然力が入らないか」

(これは戦うのは無理かな)

キリアは一つため息をつく、ラグルの方を向いて目を合わせた。

「ラグル、ベルギオンを助けに行きなさい」

「でも姉さんを置いては……」

「一人になるわけじゃないし、ここはもう大丈夫。それより折角守れたのにあっちで何かあったんじゃない台無しになる」

「――そう言われたら行くしかないじゃないですか。家に帰ったら看病しますから、ここで待っていてください」

ラグルは笛を二回吹くと、村へと弓を抱えて走る。

まだ元気な何人かの男たちもそれに付いていく。

補給で付いてきた二人も村へと向かった。

残った者たちは心労や疲れで座り込んだ。

「生きてるよな俺たち」

「ああ生きてるよ。生きてる」

「勝ったんだな……」

「だな。あいつ等が居なくなった今は足が震えやがっていいねえ」

皆生きている安堵をお互い確かめ合っている。

硬質な音が響く。

「剣が欠けそうだな……」

ベルギオンは相手の石斧と何度か打ち合うが、いずれも力負けする。

バスターソードの材質が石よりはるかに優っているのか、未だ刃こぼれは無い。

しかしこの調子で押され続ければどうなるかは予想できなかった。手数は此方が上だ。

合間合間で斬りつけるものの、石斧の範囲に入りきれず浅いダメージしか与えられない。

（くそ、最悪を考えちゃって踏み込めん）

現状でも綱渡りに近い。圧倒的な経験不足が状況をより不利にし

ている。

後ろへステップ少し間合いを取る。

重い足音を鳴らしながら、ロードゴブリンはゆっくりと此方へ近づく。

そのまま間合いを詰めると思っていると、突然右肩を前にしてベルギオンに向かって突進してくる。

いきなりの事に驚くが好機と判断し、それに合わせるように首を狙ってバスターソードを振る。

「G i h i h i h i !」

ロードゴブリンはそれをしゃがむ事で回避し、引かなかったベルギオンを笑う。

（フェイク!? ……やばい）

それを見た瞬間ベルギオンの心は焦りと後悔で満ち、反射的にバスターソードを前に構えて剣の背に左手を添える。

ロードゴブリンは突進の勢いを載せた石斧を、ベルギオンに向けて振り上げた。

石斧が体に当たる事だけは何とか防ぐ。

しかし体勢も完全ではない状態ではもとより凌げる筈も無く、敵の力に吹き飛ばされる。

そしてすぐに背中から叩きつけられた。後ろに家があったのだ。

「――ゲホッ」

叩きつけられた衝撃で息が肺から搾り出される。

（これを見越して突撃してきたのなら相当手馴れている）

立ち上がろうとするが、腰の感覚が無い。

衝撃のせいか少し麻痺しているようだ。

ポーシヨンを取り出そうとするも、ロードゴブリンは止めを刺そうと石斧を振りかぶっている。

止む無く先ほどのように剣の腹で受ける。

受けた瞬間逃げ場の無い衝撃に両肩が抜けそうになった。

敵がこのまま押し切ろうと力を入れているのか、より重くなる。

その力に抗えず、少しずつ支えている剣がベルギオンに迫ってくる。

（力が強すぎて逸らそうにも剣が動かん……！）

その時入り口から二度笛の音が聞こえる。

あちらの戦いは勝利したようだ。

「聞いたかお前。仲間みんなやられたとよ」

危機的状況でありながら、ベルギオンはロードゴブリンに挑発するかのように笑いながら言う。

「GuRaRa a!!」

言葉は分からなくとも侮辱された事は分かるのか、此れまで以上の圧力になった。

周りの男達もなんとかしようと見ていたが、彼らではロードゴブリンにダメージを与えない。

何人かが石を投げるも、ロードゴブリンはそれを相手にしなかった。

とうとう剣が眼前まで迫り、上手く腕の力が入りにくいところま

で来た。

石斧の刃が鈍い光沢を放っている。
それが否応にも死を連想させていく。

（死にたくない。こいつに殺されるなんてごめんだ！）

明確な死の恐怖。

生きていて初めて感じる感情が、粘りつくようにベルギオンの心に染み付き始める。

それでも、だからこそベルギオンは力を込める。

「俺は……生きたいんだよ。生きていたいんだ！」

この世界に来るまで生きる楽しみは仮想にしかなかった。

しかしこの世界にはそれがあるかもしれない。

ベルギオンはそう考えるようになったのだ。

懇親の力を込めた両腕は、僅かな間だが刃の押し合いを拮抗させる。

この力が維持できなくなれば、そのまま石斧が顔に振り下ろされてしまう。

（力が……抜ける……！？）

もう一秒とて持たぬ状況になったとき。一本の矢がロードゴブリンの手を打ち抜く。

「GaAa!？」

ロードゴブリンは痛みからか数歩後ろへ下がり、そして矢の来た方向を見る。

ベルギオンも同じく見ると、ラグルと何人かの男達が弓を構えていた。

撃たれたのは一矢だけ。ラグルが気を逸らす為に撃ったのだろう。邪魔をされた怒りかロードゴブリンはベルギオンから完全に興味を無くし、ラグルを睨み付けている。

（まずい！——くそ、立てない！）

ベルギオンの腰はまだ回復できておらず、力が入らない。

ロードゴブリンはラグル目掛けて石斧を構えて走る。

それを前に動じずラグルは撃つ。

迫り来る敵を前に一切の怯えなく、矢を番えて更に撃つ。

堂々たる振る舞い。数日前にゴブリンに追われて逃げていた女の子と同じ人間とは、とても思えない。

周りの男達も覚悟を決めたのか、ありったけの矢を打ち込んでいく。

心臓・頭・腹・肺。

ラグルは迫り来るロードゴブリンの急所を、洗練された動作で打ち抜く。

走ってくる速度こそ衰えるものの、急所を受けてもまだ敵は走る。もう一度頭に矢が打ち込まれたとき、ようやくロードゴブリンの意識が無くなり転げ落ちるように倒れこむ。

しかし、最後の矢が刺さる寸前に奴は石斧をラグルへ向け投擲していた。

ラグルは弓に集中しきっていて、回避が間に合わない。

石斧がラグルの右肩を切り裂いた。

「ラグル!？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0576ba/>

ジェネラルの男と竜人の娘～戦いの果て～

2012年1月13日22時56分発行